IN BLOOM ～元英雄と普通の学生～

羽鳥 紘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＮ　ＢＬＯＯＭ　～元英雄と普通の学生～

【Ｎコード】
Ｎ７５６３Ｙ

【作者名】
羽鳥　紘

【あらすじ】
彼はごく普通の高校生だった――異世界に召喚されたという経験を持つこと以外は。異世界で英雄と呼ばれていた少女と、ただの男子高校生の、逆召喚ラブコメディ◆ＩＮ　ＢＬＯＯＭ　～聖少女と黒の英雄～（ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ６７４９ｑ／）の続編になりますが、未読大歓迎です。

1．現世への帰還

俺の名前は姫野咲良、あとちょっとで十七歳。異世界に飛ばされた経験がある以外は、極めて普通の男子高校生である。

と、どんなにさらっと言ってみたところで、真ん中に挟んだ言葉のせいで、説得力は極めて皆無だ。異世界に行ったことのある人間は、どんなに主張したところでどう考えても普通ではない。

けれど、それまでは俺は本当にごく平凡な高校生だった。まあ、平凡の基準も人によりけりだろうから補足するなら、性別間違われ率１００％の女顔と名前は、非凡と言えばそうかもしれない。

でもその他は、成績中の下、部活馬鹿、女の子に興味はあるけど今は恋愛より遊ぶのに忙しいかなっていう感じで高校一年生の終わりを過ごしてた。割と平凡だと思う。

そんな俺だけど、一応好きな人はいた。その中学校から憧れていた先輩が今年高校を卒業するわけで、俺は悪友たちにたきつけられて、卒業式の日先輩に告ることになってしまった。そして見事に振られたというオチ付まで含め、やっぱり割と普通の青春を送っていたと思う。

とにかくここまでは、大多数の人が普通ってことで納得してくれると思うんだ。問題はここからだ。

四年間の片思いが思い出に変わり、俺はその日皆が下校してしまっても、屋上で一人たそがれていた。そうしたら、突然凄い光に包まれて、気がついたら知らない場所にいたのである。ここからが、どう考えてもおかしいところ。

その知らない場所は実は地球でもなくて、「フレンシア」と「ヴァルグランド」という二つの国が数百年に渡る争いを続けている世界だった。フレンシアに落ちた俺は「聖少女」と呼ばれ、兵を率いてヴァルグランドと戦うことを要求されてしまう。だがもちろん、平和な世の中に生きるただの学生の俺にそんなことができるわけが

ない（っていうかそもそも少女じゃないし）。冗談じゃないと逃げ出した俺を助けてくれたのは、皮肉なことにヴァルグランドの英雄だった。でもこの出会いが、俺の全てを変えたんだ。

結論から言えば、俺は無事地球の日本に帰ってきた。けれど、これで普通の日々に帰ってきたかといえば、そうでもない。

異世界に飛ばされた場所と全く同じの学校の屋上に、今俺はいる。けれど、俺の目の前には、この世界にいる筈じゃない人がいる。

俺を助けてくれたヴァルグランドの英雄、エドワード。だけど本当は、英雄として戦う道を選ばざるを得なかった女の子。俺が絶対にこの手で守りたいと、そう思う大事な人が。

■　□　■

彼女の手を引いて、俺はとりあえず教室に向かって進んでいた。すっかり日は暮れてしまっているし、今日は卒業式で授業もなかったから、校舎に人の気配はない。

もしかして、もう校門が締められているかもしれないから、そしたら窓から出るしかない。けどその前に着替えないと、俺もエドワードも向こうの服のままだ。いくら暗いからといって、コスプレ紛いの格好で二人で歩くのは恥ずかしすぎる。教室に行けば俺のジャージがある筈だ。

実はちょっと浦島状態を懸念していたのだが、教室にはちゃんと俺の名前があった。異世界に呼ばれたのは卒業式の日だったから、もし数日でも過ぎてしまえばこの教室に俺の名前はないわけだ。だから、時間は過ぎていない筈だった。

俺は自分のロッカーからジャージを出すとそれをエドワードに渡し、自分は適当に友達のを拝借することにする。

「えっと、そのままじゃ目立つから、とりあえずそれ着てもらっていいかな」

……こんなことなら洗濯しておけばよかった。体育で使った日は

洗濯してもらってるけど、三月に入ってから授業もあんまりなくて、掃除でしか着てなかったから置きっぱなしだったのである。さすがに異臭はしない……と思うけど、彼女の着替えを待つために廊下に出ようとしたら、突然腕を掴まれてびくっとする。
「な、何？　も、もし俺の服が嫌なら、他の……」
　といっても、女子のジャージを勝手に借りたら俺は窃盗犯になってしまう。それも変態のレッテル付きで。
「咲良」
　どうしようと考えていると、不意に強い調子で名前を呼ばれた。
「な、なに？」
　応えると、彼女は困ったようにこちらをじっと見た。そして迷うように口を開いてまた閉じ、それからようやく声を上げる。
「……着替えればいいのか？」
「え、う、うん」
　だが、勿体をつけた割にはなんてことはない問いで、俺は拍子抜けして頷いた。それを見て、ふっとエドワードは俺から視線を外して腕を離す。
「わかった。少し後ろを向いていてくれ」
「え、いや、外に出てるよ」
　彼女がそんなことを言うので、俺は少し慌てて扉に手をかけたが、そうするとまたエドワードが俺を掴む。
「――ここにいてくれないか」
　そんな言葉に顔が熱くなる。一瞬からかわれているのかと思った。けれどそれにしてはエドワードは思い詰めたような顔をしていて、それは俺をからかう為の演技などではないように見えた。それで、顔から熱が引く。
「エドワード？」
　腕を掴む手に手を重ねて、そっと呼んでみる。彼女はやはり少し迷っていたが、俺の手に視線をあてて、それからふっと息を吐いた。
「……咲良。君は、私の言葉が解っているのだな？」

たけど問いかけられた言葉が咄嗟に理解できず、俺はきょとんとして彼女を見返すしかなかった。
「え……どういう意味？」
聞き返す俺に彼女が答えたのは、ごく当たり前のことだった。なのに、全く考えもしていなかったことだったのだ。
「わからないんだ。私には君が何を言っているのか、わからない」

2．悩める家路

俺がむこうの世界で聖少女と呼ばれたのは、実際に聖少女の生まれ変わりだからだった。

もちろん、俺も始めはそんなこと信じていなかったけれど、現に頭の中で「彼女」の声が響くこと、そして俺が「彼女」と瓜二つの容姿を持つことで、否定できなくなってしまった。

そしてもうひとつ。俺が聖少女の魂を持っているからこそ、言語の違う世界で意志の疎通ができるのだと。

だとすれば、この世界となんの関わりもないであろうエドワードが日本語を理解できないのは、考えてみれば当たり前の話だ。

学校は出たものの、俺はこれからどうすればいいのか途方に暮れた。けどそうしたところで学生の身である俺には家に帰る以外の道などない。

でも、家族にエドワードのことを何て話せばいいんだろう。

そんなことを考えていると、学生カバンの中から携帯の着信音が聞こえてきた。取り出して開いてみると、画面に出てきた名前は、「姉」。

咄嗟に切りたい衝動にかられたが、そんなことをすれば余計に俺の命の保証がない。仕方なく通話ボタンを押すと、聞き慣れた、けど懐かしい、だからといって全くありがたくもない、姉の怒声が耳をつんざく。

『今何時だと思ってんのよ！？』

そして続く音声ＭＡＸの罵詈雑言は、予想がついたので既に耳から携帯を離している。それでも充分うるさいけれど。それがひととおり収まってから、俺は改めて携帯を耳に当てた。

「ごめん。ちょっと色々あって……今帰ってるから母さんにそう言

っといて。じゃ」
一息に吐き出してから、間髪入れずに電話を切る。それから俺は改めて携帯の画面を見つめた。三月十六日、午後八時過ぎ。ついでに不在着信が十件ほど入っていて全部姉。
俺が屋上で光に吸い込まれたのはだいたい五時頃だったと思うから、二、三時間くらいの誤差はあるけど、でもその程度だ。時間の流れ方が違うのか、もしくはそもそも全く関係性がないのか。考えたところで答えなんて出ないけど。
それにしても、「色々あって」の内容が異世界云々だなんて、姉も母も考えてもいないだろうな。考えていたら天才――というよりある意味病気だ。ため息をつきながら携帯をジャージのポケットに突っ込むと、そこで初めてエドワードが怪訝そうにこちらを凝視しているのに気がついた。
ああ、まあ、そりゃそうか。彼女は携帯なんか知らないわけだし。
「あ、ええとこれは携帯電話っつって……、って、言葉、わかんないんだよな」
取り出しかけた携帯を、もう一度俺は突っ込んだ。
もどかしい。
知らない世界で、知らないものばかりで不安だろうに、言葉までわからないなんて。不安を少しでも軽くしたいのに、その方法すらわからないなんて。
そんな、全く違う、何もわからない世界に、彼女を連れてきてしまったなんて。
「……ごめん……」
結局零れたのはそんな言葉だった。
謝ったところでどうしようもない。もう取り返しがつかないし、それ以前に、これが謝罪だってことも彼女には分からないんだ。
「それは、謝罪の言葉か？」
なのに、エドワードがそんなことを口にして、俺は驚いて顔を上げた。薄暗くてよくわからないけど、苦笑する彼女に不安そうな色

はなく、いつもと同じように見える。
「当たりだろう。まったく、君は解りやすくて助かる。……せめて、私の言葉だけでも君に届いて良かった」
どんだけ顔に出やすいんだ、俺……。
でも、全く意志の疎通ができないわけじゃないって分かって少しはほっとした。エドワードはやっぱり凄い。知らない世界に来ても俺と違ってうろたえたりしていないし、困ってばかりの俺よりよっぽど堂々としてる。さすが英雄と言われていただけのことはある。
それに比べて、俺のなんと頼りないことか。今はもう、異世界だからという言い訳も通じない。
一瞬自己嫌悪しかけたけれど、繋いだ手がぎゅっと握られて我に帰った。
「詫びないでくれ、咲良。私はヴァルグランドを出たことがないから、ただでさえ世間知らずで驚くことばかりだが、でもそれが楽しい。全く不安でないといえば嘘だろうが、私は大丈夫だ。君を信じているから」
優しく微笑むエドワードの言葉が、胸に直接響いてくる。
ああ、俺、アホだ。いくらエドワードが強くても、いくら俺が頼りなくても、それでも来たばかりのこの世界じゃ彼女は俺しか頼れないのに。
ぎゅっとエドワードの手を握り返す。弱気になってちゃ、守るなんてできやしない。彼女を守るって誓ったばかりなのに、早速破るところだった。
「……行こう」
言葉はわからないかもしれないけど、何も言わないよりずっとマシな筈だ。できるだけ笑顔で、できるだけ不安にならないように優しく、そう声をかけるとエドワードは微笑んで返事をしてくれた。

3．波乱の帰宅

かくして、俺は久々に自分の家に帰ってきた。
家族からしてみれば帰りがいつもより遅い程度だろうが、俺的には数カ月ぶりだ。向こうに行ってる間、ホームシックになったことはなかったが、いざ帰ってみるとなんだかすごく落ちついて、目の奥がジンとした。
とか、感傷に浸っている場合じゃなくて。
ちらりとエドワードを振り返る。
俺にはまだ、彼女を養い守って行くだけの力はない。だから、今は親に頭を下げるしかない。せめて俺が大人になるまで、ここにエドワードを置いて欲しいって頼まないと。
「もしかして、咲良の家？」
「そうだよ」
頷いてから、俺は彼女の手を引いた。だがソッコーでその歩みは阻まれた。俺の前に飛び出してきた、茶色のふさふさに。
そいつはワンワンと嬉しげに声をあげて、俺の足元で尻尾を振る。
「あぁ……シホウ。俺今忙しいから」
飼い犬のシホウである。メスの柴犬で六歳。由来は合気技から。変な名前と周囲に散々言われるが、コキュウナゲとかイッキョウとかよりは呼びやすくてカッコイイと思う。
久々にシホウと戯れたい衝動はあるが、それはひとまず後だ。そう思ってシホウの隣を行き過ぎるが、その瞬間に握っていた手がするりと離れた。
振り返ると、エドワードが……シホウと思い切り戯れていた。
「咲良！　こいつ凄く可愛い！！」
かがんだエドワードに、シホウが飛びついて顔をペロペロ舐めている。エドワードはそれをまったく嫌がらず、シホウにされるがままになりながら夢中で頭を撫でくりまわして大変上機嫌である。そ

れで俺は思いだした。
エドワードは、可愛いもの好きなんだよな。
後にしてくれという言葉を飲み込んで、エドワードを急かすのをやめる。笑い声を上げながら楽しそうにシホウと遊んでいるエドワードを見て、俺はシホウに心底感謝した。良かった。エドワードが辛そうじゃなくて。悲しそうじゃなくて。できれば、この笑顔を、俺があげられるといいんだけど。
いや、できる筈だ。エドワードの中では、俺もシホウもきっと大差ない筈だ！
俺が積極的なのか消極的なのかわからない妙な確信を得た瞬間、玄関の扉ががらりと開いて俺の肩がびくりと跳ねる。
「何してんの！　帰ってきたならシホウと遊んでないでとっとと入り――」
活動的なショートカット、Tシャツにショーパンに健康サンダルをつっかけて、玄関を開けるなり俺を怒鳴りつけてくるのは言うまでもなく――異世界に行ってもまったくこれっぽっちも恋しくならなかった俺の姉、姫野楓（かえで）だ。
だが姉はシホウと戯れるエドワードを見た瞬間言葉を切った。そして、エドワードが振り向く前に一度扉が閉まる。十秒たたずにまた扉が開いて、だがそこに現れた姉ちゃんはさっきと微妙に違っていた。髪をピンで留め、グロスを塗り直し、二―ハイにパンプスを合わせている。
「やだ、咲良。友達といるならなんでさっき言ってくれなかったのぉ」
声のトーンが確実に一オクターブは上がり、俺は全身に鳥肌が立った。相変わらず外面だけはいい。というかこっちが素の姉ちゃんで、俺にだけピンポイントで優しくないと言った方が正しいかもしれない。
それはともかく、極上スマイルでエドワードを見る姉ちゃんは、何かとっても誤解している気がした。そんなところに、とっても誤

解した母さんの声が割って入る。
「あら……咲良ってばこんなイケメンな友達がいたのね～」
やっぱり誤解している。
エドワードはイケメンではない。だけどそれ以上に、エドワードについては色々話さなければならないことがある。
「咲良、友達と遊ぶのもいいけど、遅くなるなら連絡くらい……」
母さんの小言が耳をすり抜けていく。
なんて言えばいいんだろう。その最初の一言を、俺はずっと探っていた。
でも結局浮かばなかった。親が納得するようなうまい理由も。エドワードが何者なのかを上手く誤魔化すような都合のいい言葉も。ただでさえ嘘が苦手で口べたな俺に、そんなこと最初から無理だったんだ。
それに思い当ったとき、俺は無意識に膝をついて、地面を頭につけていた。もう母さんや姉ちゃんの顔は見えないけれど、ぎょっとしているであろうことは想像に難くない。
「母さん、お願いします！　何も言わずエドワードをこの家に置いて下さい！」

■□■□■

さすがにその一言では片付かなかった。
とにかく入れと言われて、俺は立ち上がるとエドワードを連れて数ヶ月ぶりに我が家の敷居をまたいだ。
ダイニングには三人分の夕食の準備が整っていたけれど、そちらではなく母さんはリビングに座り、テレビのスイッチを消す。
「で？」
一言で説明を求められて、俺は母さんの正面に正座すると、放課後から今までの出来事をかいつまんで説明した。

ただでさえ説明が下手だから、全くの意味不明になったと思う。
屋上にいたらいきなり違う世界になって、そこでエドワードに助けられて、それで俺は今度は逆に彼女を助けたくて。
そして彼女を連れて帰ってきたのだ――と。
案の定、姉ちゃんは「何言ってるのコイツ」という目で俺を見下ろしてきたが、母さんは特に表情を動かさなかった。話し終わった俺をしばらくじっと見つめ、それからエドワードに視線を移す。
「……咲良の言ってることは、本当？」
けれど、エドワードにはこっちの言葉がわからない。俺が何を説明してたのかだってわからない筈だ。困ったようにエドワードは視線を落とし、それから彼女が声を発した相手は俺だった。
「この方達は、咲良の母上と姉上……で、合っているか？」
「うん、そうだよ」
まぁ母上だとか姉上だとかいう大層な人たちじゃないけど。エドワードの問いかけに頷くと、立ったままだった彼女は跪いて、それから俺を見て正座し直して、頭を下げた。
「私には貴方達の言葉が解らないのです。こちらの礼義も知らず、どうか非礼をお赦し下さい」
エドワードの言葉を聞いて、俺を変人でも見るような目で見下ろしていた姉ちゃんが、驚いたようにエドワードを見て自分も座った。
「えっ、何語？？」
やっぱりそうか。エドワードがこちらの言葉を理解できないってことは、エドワードが話している言葉もこちらの人には通じないんだ。
「えっと……、エドワードはこっちの言葉が解らないんだ。礼儀も知らなくて、ごめんなさいって」
簡単に通訳すると、母さんは疲れたようなため息を吐いた。
「……困ったわ」
「え？」
「適当なこと言うなって言いたいのに、あなたが嘘をつけないって

こと誰よりも知ってるから、困ってるの」
そう言って、もう一度深いため息をつく母さんが、なんだか急に歳を取って見えてしまった。
うちは全員童顔傾向にあって、母さんも実際の歳よりすごく若く見える。姉ちゃんと姉妹に見られることもよくあるくらいだ。おまけに、ウエーブのかかった茶髪をまとめるシュシュも花柄のエプロンも、およそ三十代の主婦がつけるのはどうよという代物で落ちつきのない母だから、こんな風に思い詰めたような、疲れたような母さんを見るのは初めてだった。
「とにかくご飯にしましょう。今取り分けるから、あなたも食べなさいな」
エドワードに向けてそう声をかけ、母さんは立ち上がると、戸棚から客用の茶碗を出した。

4．当然の誤解

母さんは口に合うものだけでいいって言ったけど、それが全く通じなかったのか、それとも気を遣ったのか、エドワードは出されたものは全部食べた。俺が向こうで食べてたものを考えると、そんな極端に味覚や食文化に違いはないと思うけど、さすがに和食は未知の領域だろう。未知のものを口にするのって結構勇気がいると思うのだが。

それなのに、ためらうような素振りも見せずエドワードは綺麗に全て食べ終えると、俺達を真似して手を合わせた。しかし、何をしていても惚れぼれするほど絵になる。と思っていたら、母さんも姉ちゃんも感じ入ったようにエドワードを見ていた。

やっぱり高貴な人っていうのは、言わなくても端々にそれが表れているなと思う瞬間である。

そんな風にまじまじと見る俺達に気付いて、エドワードは少し驚いたような顔をした。それで、母さんと姉ちゃんも慌てて視線を外す。なんだかぎくしゃくしているというか、気まずい空気を感じていると、不意にエドワードが俺に声を掛けてきた。

「……咲良、もし良ければ、伝えて欲しいことがあるんだが」

おずおずとそう切り出してくるエドワードに頷くと、幾分かほっとしたようにエドワードが先を続ける。

「美味しかった。それに、楽しかった」

きっと無理してるんじゃないと、伝えたいんだと思うけど。何か、俺にはその言葉自体が無理をしているように感じた。だって、俺達が何を話しているのかわからないのに、どうやったらそれを楽しめるんだろう。そもそも、みんな何を言っていいかわからず、全体的に静かな食事だったし。

俺が腑に落ちない顔をしていたからだろうか、エドワードは少し迷った素振りを見せたが、さらに言葉を付け足した。

「家族でこんなに温かい食事をしたことなど、数える程しかないから。だから嬉しい」
エドワードは本当に嬉しそうだったけど、それを聞いたら俺は少し悲しくなった。だって、俺はエドワードから本当の家族との団らんを、永久に奪ってしまったわけだから。いつかは、家族とテーブルを囲む未来もあったかもしれないのに。
「咲良。何て言ってるの？」
俺とエドワードが話しているのを見て、姉ちゃんが声をかけてくる。聞かれたので、俺は聞いたままを伝えた。
「美味しかったって。それから、あんまり家族と食事したことないから、嬉しいって」
俺の言葉を聞いて、母さんと姉ちゃんが眉を潜める。
「そうなの？　どうして？」
「えっと……エドワードの母さんと兄さんは亡くなったって聞いた。それに、向こうは戦争ばっかりだからそんな暇なかったんだと思うよ」
俺の答に、母さんも姉ちゃんも絶句する。急に場が暗くなった。
「そんな戦争ばっかりのところで、よくアンタ生きてられたね」
重くなった空気を払うために、わざとだろう。姉ちゃんが軽い調子で茶々を入れる。でも、そんな言い方をするってことは少しは俺の言ってること、信用してくれてるんだろうか。
「それはエドワードが助けてくれたからだよ。そうじゃなかったら多分死んでた」
そう答えると、また母さんが長いため息を吐いた。
「冗談でもそういうことというのやめてくれる？　……ううん、あなた冗談も下手だもんね。だとしたら、エドワードさんにはお礼を言わないといけないのね」
箸を置いて、母さんが夕食の後片付けを始める。エドワードが手伝おうとして手を伸ばしたが、母さんはそれを止めると俺を見た。
「とにかく着替えていらっしゃい。お風呂の使い方、わからないな

ら教えてあげて、とりあえずあなたの服を貸してあげなさい」
いやいやいやいや。そこで俺は大事なことを言い忘れているのに気がついた。
「いや、あの……、みんな勘違いしてるみたいだけど、その……、エドワード、男じゃないから。女の子だから」
はた、と母さんと姉ちゃんが、片付けものの手を止める。そして、たっぷり十秒くらい過ぎてから。
「……なぁぁんでそういう大事なことを先に言わない、バカサクッ！！！」
姉ちゃんの怒声とビンタが同時に飛んで、俺は食卓の椅子から吹っ飛んだ。
「咲……」
「なんだ、女の子だったのねー。じゃあ、私の着替え貸してあげるね。あ、私楓っていうの。よろしくね！　あっでも下着も要るよねー。とりあえずコンビニで買ってくるけどサイズいくつ？」
エドワードの心配そうな声は、姉ちゃんのマシンガントークに掻き消された。ちなみにそれは俺が聞いてはいけない内容な気がしたが、どっち道言葉のわからないエドワードには答えようがない。姉ちゃんもそれに気がついたのか、ぐるりと首を俺に向けた。
「いくつだろう？」
「お、俺が知るわけないだろ馬鹿！」
「知ってたらブチ殺そうと思っただけよ馬鹿」
ついうっかり取り繕うのを忘れた俺は、もう一発ビンタを食らう羽目になり、「姉ちゃんよりはでかい」という言葉を必死に飲み込んだのだった。

5．想定外の試練

「うあああ～、生き返るーーーー！」

久方ぶりの風呂に、俺は虚しくもついつい盛大な独り言を上げてしまった。

向こうでは基本的に水で体を拭くしかなかったのである。まぁ俺は体が綺麗にさえなればそれでいいけど、やっぱり風呂に浸かるのはキモチイイ。

けど、離れているとエドワードのことが心配になって落ちつかない。姉ちゃんは世話好きだから、任せておいて大丈夫だとは思うけど……、こうしてエドワードが傍にいない状態で日常を過ごしていると、夢だったんじゃないかと思って怖くなる。

だからといって、片時も離れないってわけにもいかない。向こうでは一緒な部屋で暮らしていたけど、現代日本では未成年の男女が同じ部屋で寝起きするなんてこと、一般的に不道徳だ。教育に悪い。そもそも、できる自信もない。

今でさえ、この風呂がエドワードが入った後だと思うと……ごほん。

一人咳払いをして、俺は脱線しかけた思考を強制的に元に戻した。

できるだけ傍にいると言っても、当分は春休みだからいいとして、学校が始まったらそれはさらに難しくなる。まだ喋ることもままならないエドワードが学校に通うのは難しい。そもそも、戸籍ないのに通えるかどうかもわからない。そうだ、健康保険にも入ってないのに、病気になったらどうするんだろう。あっちとこっちじゃ環境が全然違うし、いつ健康に問題が出るとも限らない。

でも戸籍なんて、下さいと言って貰えるものじゃないだろう。役所にありのままを説明しても、頭おかしいと思われるだけだろうし。

この管理された現代日本で、戸籍もなく、エドワードは生きていけるんだろうか。

いや、そこをどうにかして守り抜くのが俺の役目だろう。でも、そう思い直してはみても。俺は、この先自分の人生の何を犠牲にしても、一生彼女を守って行きたいと思っているけど……でも、エドワードが俺の傍を離れたいと思ったら……

そこまで考えて、俺は勢い良く風呂から立ち上がった。

考えるとすぐ駄目な方向に行ってしまう。とにかく、俺が一人であれこれ考えていても始まらない。

今はできるだけ、傍にいよう。

知らない世界での心細さは、俺がいちばんよく解るつもりだ。それでも俺が挫けなかったのは、エドワードがずっと傍にいてくれたからだった。今は同じことを彼女に返すくらいしかできないし、思いつかない。

そんな俺を待ち受けていた最初の試練は――

長い髪を三つ編みにして、ピンクでフリルなパジャマを着て恥ずかしそうに俯くエドワードだった。

■　□　■

とりあえずそれは、俺が想定していたどんな試練よりも強大だった。

別に、なんだ、軍服を来て威風堂々としているからエドワードは男らしいのであって、本当は可愛いことなんて自慢じゃないがとっくに知ってる。だからって、これはなんか色々駄目だろう。反則だろう。教育に悪いだろう。

だが家族の手前、俺は必死に平静を取り繕った。繕えてないのはむしろエドワードの方で、これまで全く何にも動じなかった彼女が、ここにきて初めてものすごい戸惑いを見せている。

「あたしのパジャマなんだけどさー、似合うよね？　こういうの着れば可愛いのにー。ってわけであたしもお風呂入ってくるからー。

上がったらエドちゃんのお布団あたしの部屋に敷くねー」
　また一方的にまくしたてながら、姉ちゃんがリビングを出て行く。今二人にされるのは物凄い困る。母さんもさっきから姿が見えないし、俺はパジャマ姿のエドワードと二人取り残されて、激しくうろたえた。けど、エドワードがあまりにも恥ずかしそうなのを見て少し心配になった。
「エドワード、もし嫌なら言え……ないかもしれないけど。えっと……明日、服、買いに行こうか」
　小遣いをはたけばエドワードに服くらい買ってあげられる……と思う。女の子の服がいくらするかなんて知らないけど。今は言葉が通じなくてわからないかもしれないけど、明日店に連れていってあげれば解るだろう。
　って、もしかしてそれって世間ではデートというのでは……。また思考が脱線しそうになったが、エドワードが声を上げたことによって幸いにも中断された。
「あの……、渡されたので着てみたけれど……、さすがにこれは、私には合わないのではないかと……思う」
　そう言って、エドワードは耐えかねたようにうずくまってしまった。もし嫌だと思っているならこんなこと言うのは悪いのかもしれないけれど……合わないことはないと思う。そんな仕草も含めて、可愛い。むしろ可愛すぎて困る。
　確かにピンクというイメージではないけれど、似合うと思う。俺もその場に座ると、エドワードの前で首を横に振った。
「そんなことないよ。凄く可愛い」
　ほんとだったら恥ずかしくて言えなかったかもしれないが、通じてないのをいいことに俺は素直に本音を言った。
　俺が声を上げたので、エドワードが顔を上げる。風呂上がりだからか、それとも照れているのか、ほんのり赤くなった頬がまた絶妙に可愛らしい。そもそも意中の女の子なんて何してたって可愛いのに、これはもうなんか、そう、とにかく反則だ。

色んな意味で、彼女と一緒に暮らしていく自信がなくなった。
「……変、か？」
そんな風に聞き直されて、俺はもう一度首を横に振った。
「じゃあ、その……、に、似合う、か？」
赤くなっているのを自覚しながら、何度も頷くと、エドワードはほっとしたように表情を緩めた。
「そ、そうか」
だ、駄目だ。自宅のリビングだから辛うじて理性を保っているが、こういうのは健全な思春期少年にまったくもってよろしくない。初日から限界を感じかけたが、スリッパの音が聞こえてきて、がっかり半分にほっとする。多分、母さんだ。
「あら、エドちゃん、可愛いじゃない。そうしているとちゃんと女の子ね」
たくさん箱や本を抱えた母さんが、体でドアを押して入ってくる。それにしても、妙な呼び方が定着したな。これ、エドワード、自分が呼ばれてるってわかってるんだろうか？
いやそもそも、エドワードって紹介してしまって良かったのだろうか。亡くなったお兄さんの身代わりで戦っていたからそう名乗っていただけで、エドワードにはエレオノーラという本名がある。こちらでエドワードと名乗る必要なんてないのだから、本名で紹介すれば良かったと今更になって思った。でも、勝手に呼んでいいものか分からないから、今も言えないままだけど。
「で、母さん。それなに？」
結局言えないまま、俺は母さんが持ってきたものの方に興味が逸れて、聞いてみた。
改めてよく見てみると、小さい頃見た記憶がある玩具もある。
「知育玩具よ。とにかく言葉が話せないと始まらないでしょ？　エドちゃんが言葉を覚えるのに役に立つかと思って」
エドワードの前にそれを差し出すと、彼女も興味深そうにしげしげと眺めた。ひとつ箱を開けてみて、平仮名の羅列があるボードを

出してみる。スイッチを入れて「あ」の文字を出すと、あ、とスピーカーから発声される。それを見て、エドワードもぴんときたようだった。
「これ……、もしかして、私の為に？」
頷いてみせると、エドワードは嬉々として母さんを見上げ、だけどもどかしそうに小さく首を振って俺を見る。
「礼を伝えて……、いや、礼を言いたいときにはなんと言えばいい？」
そう尋ねるエドワードは本当に嬉しそうで。
俺の答えを聞いて、母さんにありがとうと述べるエドワードのその言葉は、今までの彼女の言葉とは少し違った響きで、俺にもちゃんと届いた。

6．ココアと不安

その夜、俺はなかなか寝付けなかった。
自分の部屋も、自分の布団も、とても寝心地はよくて睡魔は襲ってくるけれど、でもそのまま眠ってしまったらヴァルグランドで過ごした記憶も、エドワードも、全部夢物語になってしまいそうで怖かった。
眠ってしまいそうになっては飛び起きて、そんなことを十回も繰り返すと俺は眠ることを諦めた。どうせ明日から春休みだし、眠れなかったところで差し支えない。
でも、起きて電気をつけたところで、することなんてない。エドワードが気になるけれど、だからって姉ちゃんの部屋に侵入する勇気は俺にはない。侵入して、何がしたいというわけでもないし。ただ、エドワードがちゃんとそこにいるってわかれば安心できるかもしれないけど、でも結局離れてしまえばまた不安になるし。
何かものすごく、彼女に依存しているような気がした。向こうの世界で離れたときも、ずっとエドワードのことばっかり考えていたし。子供じゃあるまいし、いい加減にしろと自分に言いたい。
でも、言い訳するわけじゃないけど、それはエドワードが別世界の人間だからだ。同じ世界で、例えばクラスメートとかなら、ここまで不安にはきっとならない。向こうの世界で過ごした日々も、彼女自身の存在も、酷く現実感を伴わないから怖い。　俺は重いため息をつくと部屋を出て、音を立てないようにキッチンまでいくと、コップに水を注いで一気飲みした。ますます目が覚めただけだった。こんな調子で、俺、明日から大丈夫か。
「咲良」
ぼんやりしていると、突然呼ばれて俺はびくりと肩を跳ねさせた。でも、驚くのとは逆に、とても心は落ちついていた。多分、今いちばん聞きたかった声を聞けたから、だと思う。

「あ……ごめん。起こした？」
「違う。私も眠れなかっただけだ。それと、音や気配には敏感なんだ。軍人だからな」
言いながら、エドワードがダイニングの椅子を引く。そして腰をおろしてから、言い直す。
「……いや、元軍人、か」
複雑な顔をするエドワードに、何と言っていいかわからない。でもそれ以前に、今すんなりと会話が通じたことを怪訝に思ってまじまじと彼女を見ると、それに気付いたのだろう、エドワードはふっと笑った。
「言っただろう。言葉が通じなくても、君が何を言いたいかはわかる」
「――敵わない、な」
小さく呟いて、俺は使っていたグラスをゆすぐと、しまう前にそれを使って、飲み物を飲むジェスチャーをしてみせた。
「何か飲む？」
通じなかったわけではないだろうが、エドワードが悩むように俯く。俺も少し迷ったけれど、返事を待たずに冷蔵庫を開けた。何かしてないと間がもたなかったし、飲まないならそれでもいい。
俺が普段牛乳しか飲まないせいで、冷蔵庫には牛乳しかなかったけど、確かココアがあった筈だ。
鍋を使うと洗いものが面倒なので、レンジを使ってココアを作り、エドワードの前に置く。彼女はしばらく俺とココアを見比べていたが、やがてマグカップに口をつけると、目を輝かせてこちらを見た。
「旨い」
そういえば、エドワードは甘い物が好きだったな。彼女が喜ぶのを見てほっとしながら、俺も隣の椅子を引いた。けどそこからどうすればいいのかわからなくなって、結局間が持たなくなる。何を話しても言葉が通じないのだからもどかしい。
しばらく、エドワードがココアを啜る音だけを聞いていたけど、

それを飲みほしてしまうと静寂が訪れた。
「……不思議だな」
ややあって、エドワードがそんなことを呟く。
え、と聞き返すと、彼女はこちらを向いて、また少し複雑そうな表情をして、それから微笑んだ。
「今が不思議だ。眠ってしまったら、全部が夢になってしまいそうで……怖い」
「俺も、同じこと考えてたよ」
胸のうちを代弁するかのようなエドワードの言葉に、思わずそう呟いていた。
そして少しほっとしていた。エドワードがそれを、怖いと言ってくれたことに。夢であって欲しいと思っていないことに。
急にふわりと肩にぬくもりを感じてそちらを見ると、エドワードがもたれるようにして俺の肩に頭を乗せていた。触れあっていることにどきりとして、鼓動が早くなる。
「……早く、君とちゃんと話ができるようになりたい」
エドワードが喋るたび、鼓動がさらに加速する。抱き締めてしまいたかったけど、もし家族が起きてきたらどうしようとためらっているうちに、温もりは肩から離れていった。
「そろそろ、戻る。楓さんが心配するかもしれないし」
カップを持って立ち上がり、エドワードがそれを流しに置く。引き止めたかったけど、引き止めて何ができると言えば何もできない。でもただ、一緒に居たかった。
「ありがとう、咲良。……また、明日」
けどどのみちそんな我儘を伝える方法もなくて、うん、と頷くしかできない。でも、また明日という言葉が少しだけ、胸の不安を拭ってくれた。
片時も離れないのは無理だけど、でも明日になったらまた会えるんだ。これで二度と会えないわけじゃない。世界に隔たれてしまったわけじゃないんだから。

そう自分に言い聞かせて、俺はエドワードを見送ると、自分も部屋に戻った。

肩の温もりを思い出すと、それからはすっと眠りにつくことができた。

7．幸せの定義

起きたら、既に昼を過ぎていた。

布団を跳ねのけて、ジャージのままで部屋を飛び出す。リビングに飛び込むと、キッチンにいた母さんが呆れた顔でこちらを見た。

「いつまで寝てるの――」

「エドワードは！？」

さすがにこんな時間まで寝てることはないだろう。だけど姿が見えないことに焦って、俺は母さんの声を遮って叫んでいた。何のことって言われたらどうしようって、答えを待つ時間が気が気でない。そんなもの、実際は数秒でしかないのに。

「とっくに起きてるわよ。服を買いに楓と出かけたわ。楓の服じゃサイズが合わなかったみたい」

そりゃそうだろうな。姫野家は全体的にみんなちっちゃい。その中でも姉ちゃんは一番ちっちゃい。でもエドワードは――認めたくないが――俺よりも身長高いから、パジャマみたいなゆったりした服ならともかく、私服は姉ちゃんのじゃ無理だろう。

とにかく母さんがそう言うのを聞いて、やっと俺はまともに呼吸ができた。そんな俺を見て母さんが苦笑する。それに気付けば、今度は物凄く恥ずかしくなった。これじゃ、余裕がないのが周囲にバレバレだ。

でも落ちついたら落ちついたで、俺が一緒に行こうと思ってたのにとちょっと残念な気持ちになる。まぁ俺は女の子の服のことなんてわからないから姉ちゃんの方が適任だとは思うけど。

そんなことを考えられるくらいには余裕も出てきたので、俺は着替える為に部屋へ引き返そうと扉に手をかけた。けれどその前に、母さんに呼びとめられる。

「待ちなさい、咲良。二人が帰ってくる前に、話があるの」

有無を言わさぬ声に、俺は扉に掛けた手を引いた。母さんがダイニングの椅子を引いて座ったので、俺もその向かいに腰を下ろす。
「……何？」
「人が一人生きていくってどれだけ大変か、あなた知ってる？」
突然の切り出しに、俺は息を飲んだ。
それは、鋭いけれど酷く遠まわしな言葉だった。それでも、母さんが何が言いたいかはなんとなくわかる。
「……知ってるよ」
「そーお？　まだ働いたこともないのに？　じゃあ自分の学費いくらか知ってる？　食費は？　この家の維持費は？　どんな保険に入ってるのとか、どんな福祉を受けてるのかとか、それにはどんな手続きがいるのかとか、受けられなかったらどうなるのかとか、全部知ってるのね？」
「う……」
何か言い返したかったけれど、何も言えなかった。俺は寝て起きてご飯食べて学校行って遊ぶという毎日しか送っていないのだ。母さんの言葉に、それを嫌というほど思い知らされる。
エドワードが人並みに生きて行くには、いったいどれほどのお金がかかるんだろう。それを考え出したのを見透かしたように、母さんはさらに言葉を続けた。
「お金の問題だけじゃないのよ。エドちゃんには戸籍がないから、あらゆる福祉が受けられない。学校にも行けないし、働くことだって難しい。けどそんなことは、それこそお金さえあればどうにかなるわ。でも、自立することはとても困難よ。あなたは彼女を一生面倒見る覚悟があって連れてきたの？」
それくらいのことは、俺も少しは考えた。
それだけじゃない。知らない世界で俺と生きていくより、元の世界に残った方が彼女にとっては幸せだろうって、それだってちゃんと考えた。
でも駄目だった。

頷く俺に、母さんはため息をついた。きっと、俺が何も考えてないって思って呆れているんだろう。
確かにそうだ。今挙げられたこと意外にも、彼女がこの世界で生きて行くのには沢山の障害があるんだろうと思う。
「ごめん、母さん。俺は世の中のことなんて何も知らない。生きていくのがどんな大変かなんて知りもしないのに誰かの一生に責任持つなんて、到底無理だってわかってる。わかってるけど、それがどれだけ無理なことでも、俺はやってみせるよ」
わからないくせにデカイことを言う俺を、母さんは笑いこそしなかったけど、難しい顔をして見つめた。
難しい顔といえば、あっちの世界での友人を思い出す。きっと、誰よりもエドワードの幸せを願っていたあいつの為にも、俺は絶対に後には引けない。
「自分で馬鹿なこと言ってるってわかってるよ。でも、エドワードはずっと命懸けで戦ってたんだ。怪我ばっかりで、だけど国の為とか家族の為とかで、自分のことといつも後回しで……、俺は母さんとか周りの大人のお蔭で今までぬくぬく生きてたからさ、そういうの見てられなかったんだよ。耐えられなかった。幸せになって欲しいんだ」
うまく言えないけど、何も考えないで連れてきたわけじゃない。それだけは分かってほしくて、俺は懸命に言葉を繋いだ。じっと俺を見る母さんの目は厳しかったけど、俺が言葉を切ると、ふっと母さんはそれを緩めた。
「あなたがそんな風に真っ直ぐで、優しい子に育ってくれたことはとても嬉しいわ。でもね……、幸せの定義は人によって違うの。あなたは、自分の考える幸せを彼女にも押しつけようとしていない？」
母さんの言葉が、鋭い刃のように胸に刺さった。
違うって、言いたいのに言葉にならない。
ヴァルグランドを出たあの日から、ずっと俺は、戦いさえなければエドワードは幸せになれると思ってた。

――戦いさえなければ。でもそれは、果たして正しかったのだろうか。胸につかえていたその思いが、母さんの言葉で一気に膨れ上がって俺にのしかかる。

凍りついたような時間は、玄関の扉が開く音によって動き出した。

母さんが、小さく息を吐いて立ち上がる。

「ただいま！　ねえ見て見て、すっごく可愛いんだよー、羨ましいなぁ身長高いのって！　しかもほっそいほっそい！」

かしましい姉ちゃんの声が家中に響き、玄関まで出迎えに行った母さんが、「ほんとに可愛いわー」と今までとは別人のようなのんびりした声を上げる。でも俺はその場から動けなかった。

8．心重ねて

外出から戻ったエドワードは、多分姉ちゃんが選んだのであろう、新しい服を着ていた。ニットのワンピース（けっこうミニ）にタイツ、色は全部黒だったから、少しは自分の意見も伝えられたんだと思う。

「細いんだから足出せばいいのに、二―ハイですらNGされちゃった」

と、姉ちゃんは残念そうに肩を竦めていた。確かにそれは俺も残念……ごほん。

男装してたせいもあると思うけれど、エドワードは肌を見せるのを極端に嫌う。多分傷を気にしてるんじゃないかと思う。そのことで婚約者に酷いこと言われていたし。

エドワードは嫌がるだろうけど、あれを見れば、母さん達だって俺がこちらに連れてきた気持ちもわかるんじゃないか。

そう思う一方で、でも俺が彼女を連れてきた本当の理由は、彼女の幸せを考えたからでも、戦いから解放したかったわけでもないだろうって、自分を苛む声が消えない。

「……元気がないな？」

声をかけられて、顔を上げる。ふと気がつくと、エドワードが心配そうにこちらを覗きこんでいて、慌てて俺は作り笑いを浮かべた。

「そんなことないよ」

色々悩むことはあるけど、それで彼女に心配かけてちゃ本末転倒だ。

俺は顔に出やすいから、特に気をつけなくちゃいけない。オーバーなくらい首を横に振りながら、俺は古紙の束を持ちあげた。片付けものをしている途中だったのである。

ほぼ物置と化していた空き部屋をエドワードの部屋として使える

よう、朝母さんが片付けてくれたらしい。それで、母さんがまとめた古紙や粗大ゴミを俺が運んでいる。父さんが単身赴任中ってのもあり、力仕事は全部俺っていうのがこの家では当然のルールだ。

「運べばいいのか？　手伝おうか？」

「いいよ。けっこう重いし」

もう一度俺は首を横に振ったが、エドワードはひょいと積んであった段ボールを持ちあげた。

「力と体力には自信があるが」

「いっいいの！　わかってるよ！　でもエドワードはやらなくていいの！」

両手に持っていた紙束をおいて、エドワードから段ボールをひったくる。何が詰まっているのか、結構な重さでふらつきそうになった。だが俺の中の意地という意地を掻き集めて踏みとどまる。

そりゃあこんなもの運ぶくらい、エドワードにとってなんでもないことだろう。俺より力や体力もあるだろうさ。それでも、母さんや姉ちゃんに見られたら何を言われるかわかったもんじゃない。

その母さんは昼食の片付け中で、姉ちゃんは鼻歌を歌いながらパソコンを弄っていた。エドワードの部屋に置く家具を探しているんだそうだ。

俺はどっかの超絶シスコン君と違って、ぶっちゃけ姉ちゃんが苦手だ。でも、今人生で初めて、姉ちゃんがいてくれて良かったと思っている。女の子の服や家具を見繕ったりっていうのは、俺には絶対に無理なことだったから。

だからこそ、こういう力仕事は俺がやらないと。ただでさえ俺は体力しか取り柄がないんだから。

というわけで、俺は段ボールの上に紙束を乗せて歩き出した。粗大ごみの日までまだ日があるから、とりあえず車庫に置いておけばいいだろう。家の外に出て、邪魔にならないよう車庫の端っこに積み上げていると、後ろから足音が聞こえた。

エドワードがついてきたのかと思ったけど、振り返った俺が目に

したのは、母さんの姿だった。
「さっきの話だけど……」
振り向くと同時に母さんが声をかけてきて、俺は重い気持ちで額の汗を拭った。色々考えると辛い。けどだからって背を向けてはいられないから、まっすぐに母さんを見る。
「うん」
「今更言っても仕方ないことだったと思って。でもね、知っておかないとこの先あなたもエドちゃんも辛いと思うから」
「分かってるよ。言ってもらえて良かったと思う。母さんにも姉ちゃんにも感謝してるよ」
素直にそう言うと、母さんはほっとしたように笑った。
「今はとにかく、エドちゃんが言葉を覚えて、こっちの世界のことを理解してもらうのが先ね。それから彼女とも話しあって、一個ずつ考えていきましょう」
心強い言葉が胸に染みて、思わず涙ぐみそうになってしまった。
正直、ここまでの理解と協力が得られるとは思わなかった。
異世界から人一人連れてきて、養ってほしいって我儘を言う子供なんて、日本中、いや地球のどこを探したって俺しかいないだろう。
「ありがとう。迷惑かけてごめん……母さん」
「自分の子供の後始末をするのも親の仕事のうちよ。それよりエドちゃんのことを考えてあげなさい。今彼女の言葉がわかるのは、あんただけなんだから」
その言葉に背中を押されて部屋に戻ると、エドワードは窓を開けて外を見ていた。長い黒髪が風になびいて、その横顔はとても寂しそうに見えた。
「エドワード」
呼ぶと、彼女はこちらを振り返った。……今まで思い詰めていてあまり意識してなかったけど。
ミニワンピ姿のエドワードは、まるでモデル雑誌からそのまま出てきたかのように、綺麗だった。

「あの……似合うよ。その服」
物凄く今更な言葉は、さすがのエドワードでも予想できなかったのだろう。首を傾げるエドワードの傍まで行って、服のことだとわかるように袖を掴む。
「似合う。可愛い」
可愛いというと、エドワードの表情が少しだけ動いた。さんざん姉ちゃんと母さんが可愛い可愛いと連呼していたから、なんとなく褒め言葉だということはわかるんだろう。
……そういえば、可愛いって日頃散々俺が言われてた言葉だな。
「……可愛いよ」
いつもエドワードからされてるように、今度は俺が、そう言ってエドワードの髪を撫でてみた。やられるのは慣れたけど、やってみると恥ずかしさ倍増である。多分耳まで真っ赤な俺を、エドワードは少し驚いたように見つめてきたが、やがてふっと彼女も微笑んだ。
「咲良も可愛い」
俺の言いたいことは伝わったようで、彼女もそう言いながら俺の髪をくしゃりと撫でた。

9．言えない言葉

「じゃーんっ！」
そんな効果音と共に納屋の扉を姉ちゃんが開ける。そして、その中を見て俺は絶句した。

数日後の朝、姉ちゃんが注文していた家具が届いた。叩き起こされてベッドの組み立てとかは俺がやったけど、その後は外に放り出され、昼過ぎになった。呼ばれて戻ってきてみれば、なんともラブリーな部屋が完成していたわけである。
一言で言うなら、とにかくピンクだ。カーテンもシーツも布団もラグも、ピンク一色。
「……姉ちゃん」
「ん？」
「これ、姉ちゃんの趣味だよな……？」
「だぁって、エドちゃんの趣味わからないもん。大丈夫、女の子はみんなピンクが好きなのよ～」
いや、絶対にそんなことはないと思う。
別に俺も本人から聞いたわけではないが、エドワードは多分黒が好きなんじゃないかな……。今日もエドワードは、黒のインナーに黒のパーカー、そして黒のショートパンツと黒のタイツで黒づくめだ。前に姉ちゃんと買いものに行ったとき服は何枚か買ったみたいだけど、俺は今日まで黒以外を着ているエドワードを見たことがない。
「あのさ……、多分だけどさ、俺、エドワードは黒が好きだと思うんだけどさ……」
「やっぱりピンクが可愛いよね～。お姫様気分だよね～」
うわ聞いちゃいねぇ。だいたい、気分に浸るまでもなく、エドワードは正真正銘お姫様だ。

当の本人は、唖然として真っピンクの部屋を眺めていた。やっぱどう考えてもこれはエドワードの趣味ではないと思う。だけど大変申し訳ないことに、これでいいのかと聞いて否と言われても俺はそれを姉ちゃんに伝える勇気はない。
「どう、エドちゃん。気に入ってくれた～？」
呆然と立ちすくんでいるエドワードの手を取って、姉ちゃんが彼女を部屋の中に引き入れる。エドワードは我に返ったように数回瞬きをした後、改めて部屋の中を見回した。
「私の、部屋？」
片言の日本語でそう問いかけたエドワードに、姉ちゃんが何度も首を縦に振る。だけどそれを見たエドワードは、何故か項垂れてしまった。
「咲良」
「ん？」
不意に呼ばれて、やっぱりこのピンクが気に入らなかったのではないかと俺は焦る。だけど彼女が口にしたのはそんなことではなかった。
「こんなに良くしてもらって、いいのだろうか……。私は……、君や、君の家族にとって迷惑ではないか……？」
戸惑いがちな声に、胸が締め付けられる。
違う、一番迷惑な存在はこの俺だ。
無理やりエドワードを違う世界に連れてきてしまって、家族に負担を強いて。
この家具や、彼女の服のお金は一体どこから出ているんだろうと思うと、お世辞にも金持ちとはいえないウチの家計が気になってしまった。
「ねぇ、咲良。エドちゃんなんて？　もしかして気に入らなかったのかな」
珍しく姉ちゃんがしおらしい様子でそんなことを聞いてくる。
マイペースすぎる日頃の行動を考えたら思いきり頷いてやりたい

ところだけど。それはエドワードの本心を伝えることにならないから、俺は首を横に振った。
「いや、ただ戸惑ってるみたい。こんなに良くしてもらっていいのかって」
「なーんだ。びっくりしたよ～」
一瞬で、ころっと姉ちゃんが笑顔に戻る。そしてエドワードの両手をぎゅっと握りしめた。
「あたしずっと妹が欲しかったんだー。まさか咲良のカノジョになってくれるようなモノ好きな女の子がいるとは思わなくて全然期待してなかったんだけどさー、こんなに美人さん捕まえるなんてさすがちょっとは我が弟だよね～」
今、どさくさにとても失礼なことを言われた気がする。そして、ちょっとは弟とか、エドワードより日本語が崩壊している。でも、それより何よりも。
「あ、あのさ……別に彼女っていうわけじゃないから……」
エドワードが言葉が分からなくて良かったと、今だけは思う。
俺は気持ちを伝えたつもりではあるけど、明確に好きです付き合って下さいと言ったわけじゃないから、なんとなく俺とエドワードの関係って曖昧なままな気がする。だからそう言ったのだけど、姉ちゃんはそれを聞くなりエドワードの手を離して俺に詰め寄った。
「何ソレどういうこと？　じゃあんたは、あんたに気もない女を無理やり違う世界に連れてきたってこと？」
「そういう……わけじゃないと思うけど、多分。でもなんというか……、その、彼女とかその段階まで行ってないというか……」
「じゃあどの段階なのよ」
ストレートに聞かれて、俺は答えに詰まった。多分真っ赤になっているであろう俺を見て、姉ちゃんが“にやり”と笑う。とてつもなく嫌な予感が全身を駆け抜けた。
「ねえ、エドちゃん。エドちゃんは咲良をどう思って――」
「本人の前で聞くな！！」

どの道エドワードには通じないと思うけど、咄嗟に俺は大声で遮って、姉ちゃんを部屋の外に押し出した。
けど駄目だ。もう遅い。これから俺はこのネタで姉ちゃんに弄られ倒されるんだ。どうしようもなく悲しい予感と共に姉ちゃんを一生懸命部屋から追い出して戸を閉めようとすると、背中からエドワードの声が飛んだ。
「楓さん、ありがとう」
流暢な日本語だった。それに驚いて姉ちゃんが手を緩めた隙に、俺は部屋の戸をぴしゃりと閉めた。
「……楓さん、なんて言ってたんだろう」
嵐が去って静かになった部屋に、そんなエドワードの声が落ちる。俺は姉ちゃんが再び侵入してこないよう戸を押さえていたが、その気配がないので手を離した。
「エドワード、日本語ちょっとうまくなったね」
俺の答えはエドワードの独り言とは全然関係なかったけど、意味は通じたようで彼女はこちらを見て微笑んだ。
「もらった道具や本で自分なりに勉強してみた。他にも咲良達の会話を聞いたり、てれび……？　で観たりして、動作や表情などで推測して調べたりしていたらなんとなくわかってきたよ」
それは凄い。じゃあもしかして、さっきの姉ちゃんの言葉とかも大体解っていたんじゃないかとちょっと焦る。
「剣を振っているだけだと思っていただろう？　これでも王家の人間として学習はしていた。成績も良かったんだぞ」
でも俺の焦りとは見当違いなことを得意げに言われて、少しほっとする。
いや、ほっとしてる場合じゃないんだ。俺は大事なことを曖昧にしたままなんだって気付かされた。言葉が通じないことを、俺は逃げ道にしていたんだ。
でも、考えてみれば言葉が通じないっていうのは変な話だ。向こうにいたときは、俺の言葉は皆に通じていた。それは、俺がちゃん

と向こうの言葉を喋っていたってことだろう。今だって、俺だけはエドワードが何を言っているのかわかる。ということは、今だって話せる筈なのに。

意識が日本語に向いているから駄目なのかな。元々異世界の言葉を喋っているつもりなんてなかったから、母さん達と話をしているとどうしても日本語にしかならないのかもしれない。でもそれだったら、無意識になってみれば、もしかして話せるかも。

黙り込んだ俺を不思議そうに見るエドワードを見つめながら、俺は雑念を追い払うのに集中してみた。それから、向こうの世界でエドワード達と話していた自分をイメージしてみる。

通じるように。そう祈りながら口を開く。

「エドワード、俺……」

そこまできて、何を話すか決めてなかったことに思い当たる。他愛もないことで良い。それか、俺が言ってることわかるって、単刀直入にに聞いてみればいい。そう思って言葉を続けたのに、出てきたのは全然違う言葉だった。

「俺さ……、ずっと、戦争さえなければあんたは救われるって思ってたんだ。だから、こっちに連れて来ればいいって、そればっかり考えてた。でも違うよな。知らない世界で生きていくってそんな簡単じゃないよな……」

「咲良？　……すまない、よくわからない。もう少しゆっくり喋ってみてくれないか」

零れ落ちる俺の懺悔は、やっぱりエドワードには理解できていないみたいだった。

落胆する気持ちの中に、ほんの少し安堵が混じることに自己嫌悪しながら、通じていないと分かっていて俺はその先を続けた。

「でも、どうしても離れたくなかったんだ。……好きなんだ……」

通じていたならきっと言えなかった、俺のどうしようもない我儘を。

10．敵だらけ！？

当初でこそ、突然の居候に家族はぎくしゃくしていたけれど、それで俺が負担を強いていると思い悩んだのも数日のことで。しばらく経ってしまえば、驚くほどエドワードは俺の家族に馴染んでいた。

「エドちゃんって軍人さんだったんでしょ？　それなのに料理上手なのね～」

「切るのは得意です」

「ああ、なるほど～」

キッチンで母さんとエドワードがなんだか物騒な会話をしている。家族と簡単な会話をするのには差し支えないほど彼女の日本語は上達していたけれど、さすがに全部理解しているわけではないと思う。でも母さんはやや天然なのであんまり気にしない。結果、横で聞いているとちょっとおかしな会話が交わされている。

本人達が気にしてないから俺も気にしていないけれど。

そんなことよりも遥かに気になるのは――

「はい」

エプロン姿で今夜のご飯を差しだしてくるエドワードなのである。相変わらず私服は真っ黒なんだけど、エプロンはピンクでフリルつきだ。多分姉ちゃんのなんだろう。姉ちゃんが料理してるとこなんて見たことないから、必然的に姉ちゃんがこれつけてるのも見たことないが。

「咲良？」

「え？　あ、はい、アリガトウゴザイマス」

家族は打ち解けたけど、今度は俺がぎくしゃくしている。ぼんやりしていたことに気付いて、慌てて俺は差しだされた皿を受け取った。湯気の立つホワイトシチューは旨そうだけど、俺の視線はそっちよりもエドワードに釘付けになってしまう。

だけどリビングに姉ちゃんが入ってきて、俺は慌てて目を逸らし

た。見惚れてるなんてバレたら何て言ってからかわれるかわかったもんじゃない。
「わぁ、今日はシチュー？」
「ほとんどエドちゃんが作ったのよ。助かるわぁ。楓は全然料理できないものね」
母さんの言葉に、姉ちゃんがアハハと乾いた笑い声を上げる。
見ていたから知ってるんだけど、これをエドワードが作ったのだと改めて意識すると、なんだか食うのも緊張する。好きな女の子の手料理は男のロマンだ。まずくても完食当然のところ、これがまた普通に旨いので、思わず三杯おかわりしたら姉ちゃんにくすくす笑われた。

「つくづく不思議だな」
夕飯の後はエドワードが自ら後片付けを買って出て、母さんと姉ちゃんはリビングでテレビを見ている。俺がエドワードの洗ったものを拭いて仕舞っていると、不意に彼女はそんなことを言った。
「何が？」
「見たこともない食材も多いけれど、基本的には国で使っていたものとあまり変わらない。味付けとか、細かいことを言えば違いはあるが、世界が違うことを考えれば酷く類似していると思う。不思議だ」
言われてみれば。
同じ地球上でさえ、文化が全く違うところもあるのだ。でも、俺も向こうで文化の違いに困ったということはあまりない。食べ物だって普通に受け付けた。でもエドワードの言う通り、世界が違うことを考えたらそれは凄いことかもしれない。
「食べ物だけじゃない。花も動物も……人間も。私のいた世界も咲良の世界もあまり変わりない。デンキ……？　とかは、なかったけれど、ルゼリアのような国もあるからな。もしかしたら遠く離れた国というだけで、同じ世界なのかもしれないとも思うよ」

エドワードがそう言うのを聞いて、俺はふと食器を片づける手を止めた。
ルゼリアというのは彼女がいた世界の国で、魔法みたいな力が存在していた不思議な国だ。ヴァルグランドやフレンシアが、こっちの世界でいうと西欧諸国によく似ているのに対して、ルゼリアはその両国とも、こちらのどの国とも、一線を画していた。だから、彼女が言うことは凄くよくわかる。ルゼリアみたいな国があるなら、この日本という国が彼女の世界に存在していたからといっておかしなことではないだろう。
でも、俺はこの世界にヴァルグランドが存在しないことを知っている。
エドワードには想像もつかないかもしれないけど、知らないことはネットで検索すれば一発で出てしまうような時代なのだ。この星に幾つ国があるのか、どんな文化があるのかなんて調べつくされているし、それだけでは飽き足らず人は宇宙にまで進出している。
でもそんな事実を言えば、エドワードが決して元の世界に帰ることはできないって突きつけることになる。
「咲良。別に私は帰りたいと言っているわけじゃない。……そんな顔しないでくれ」
気がつくと、苦笑しながらエドワードが俺を覗きこんでいた。
顔を見るだけで俺の心を読まないでくれ。それもきっと、言わなくても伝わっているんだろう。ふっと笑いながら、エドワードは残りの食器を棚におさめていく。
「エドちゃん、ありがとう。先お風呂入っていいわよ～」
「ありがとうございます。……咲良は？　後でいいのか？」
飛んできた母さんの声に返事をしてから、後半は俺に向かってエドワードが問いかけてくる。
「いいよ俺は後で」
「なんなら一緒に入るか？」
「ばッ……！　なな、何を……！？」

真顔でそんなことを言われ、思わず悲鳴に近い声を上げてしまう。いやさすがにからかわれているのは分かるが、家族の前でなんて冗談を――と思ったところで、叫ぶ俺を怪訝そうに見る母さんたちの視線に気付いた。……そうだ。エドワードが普通に喋ったら、俺にしか何を言っているのかわからないんだ。

エドワードは笑い声こそ上げていないが、苦しそうに腹を抱えている。

くっ、手のこんだ嫌がらせだ。なんか、この家、敵だらけな気がした。

11．ふたりきりの日

どこか遠くで……呼ばれている気がする。
上も下もない曖昧な空間。それは覚えのある感覚だった。
耳で聞こえるのではなく、頭に直接響くような、不思議な声。
咲良と、俺を呼ぶ声。
それはずっと遠くから……少しずつ、近くなっていく。
この声を、俺は知っている。この声は――

「咲良！！」

――姉ちゃんだ。

いきなり間近で爆発する怒号に、俺は布団を飛ばして跳ね起きた。
「なッ――何？　学校なら、まだ春休みで……」
「んなことは分かってるよッ！　電話、あんたに」
「あぁ……」
寝ぼけた頭で電話を受け取ろうとして、慌てて俺はぶるぶると首を振った。今覚醒した。そうだ、携帯の電源を切ってたんだった。
電話を持った姉ちゃんから後ずさりながら、俺は両手をクロスさせて×印を作る。居留守のサインだ。姉ちゃんは半眼で俺を見ながら、再び自分の耳に受話器を当てた。
「咲良は、居留守です」
「ばッ、馬鹿――ぐはッ」
飛んできた受話器が直撃し、俺は痛む頭をさすりながら仕方なく投げられた受話器を拾った。誰からと姉ちゃんは言っていなかったが、十中八九部活の奴だ。
「……うん。だから風邪なんだって、春休みが終わるまで」
聞こえてきた声は案の定後輩で、俺は我ながら無茶苦茶な理由を

つけて一方的に電話を切った。今はとてもじゃないが悠長に部活なんてやってる場合じゃない。
春休み中にも練習はあるし、合宿もあるし、学校が始まっても部活をやっていたら帰るのが遅くなる。
学校はやめられなくても、せめてそれ以外ではエドワードの傍にいてあげたかったから、俺は部活を辞める気でいる。まぁ、俺が傍にいなくてもエドワードは平気かもしれないけれど……。
「あんた、部活辞めるの？」
今のやりとりで、大方想像がついたのだろう。電話を切ると、姉ちゃんが開口一番そう言った。
「うん」
「部活しか取り柄ないくせに？」
「合気道はやめないよ。落ちついたら道場に顔出す」
「じゃあ部活やめるのはやっぱ、エドちゃんのため？　恋なの？　青春なの？」
「ばッ、ちッ、違う、そんなんじゃ――」
「今馬鹿って言おうとした？」
耳ざとく姉ちゃんが低い声を出して拳を固め、俺は激しく首を振る。今度はちゃんと気付いて途中でやめたのに、これで殴られたら理不尽だ。
「そんなんじゃない――とも言えないかもしんないけど……ほら。環境変わって不安だろうし、ちゃんと言葉わかるのも俺しかいないし……なんつーか、心配なんだよ」
「エドちゃんは別に、あんたがいなくても大丈夫と思うけどなー」
うッ、それは俺もそう思うけど。いやでも、強がってるだけかもしれないし。
姉ちゃんは知らないだろうけど、エドワードは大丈夫じゃなくても大丈夫じゃないとは言わないんだ。大抵自分で抱え込んでなんとかしようとする。そして何とかしてしまう。エドワードの中でもそれが当たり前になっているんだろうけど、それじゃいつか潰れてし

まう気がする。
「大丈夫っぽく見えるけど、エドワード、すぐ強がるんだ。本当に大丈夫かわかるまでは、傍に……」
「何の話だ？」
突然闖入してきた声に、俺は舌を噛みそうになった。
部屋着に濃いグレーのカーディガンを羽織ったエドワードが、いつの間にか姉ちゃんのすぐ真横にいる。
落ちつけ俺。けっこう早口だったし、きっと何を言っていたかエドワードには解っていない筈だ。
「なんでもないよ。それより朝ごはん……」
「もう昼だし。それより咲良、あたし用事があるの。夜はリツカんち泊まるから、母さんにそう言っといて」
よし、今日は姉ちゃんがいない。バラ色の一日だ。
とても幸せな気分に浸りながら改めて姉ちゃんを見てみれば、ワンピースにジャケットを羽織り、髪は整髪料まで使ってセットしてて、いやにめかしこんでいる。姉ちゃんの口からは女友達の名前しか出なかったけど、これは……多分男と会うな。
ちなみにリツカというその姉ちゃんの親友は、俺もよく知る人である。フルネームを汐崎律華、卒業式に俺が告って振られた先輩だ。
だから、もしかしてダブルデートなのかと思ったらちょっと複雑だった。でも前みたいな痛みではない。
その痛みだって、感じていたのは凄く短い時間だった。幸か不幸か、すぐそれどころではなくなっていたから。逆を言えば、すぐそれどころじゃなくなってしまうくらい、淡い想いだったのかもしれない。
とにもかくにも、言うなり姉ちゃんは飛び出して行った。多分、でかけるところに電話が鳴ったんだろう。
「……母さん、いないの？」
母さんに言っといてってことは、そういうことになる。エドワードに聞いてもわからないだろうと思ったが、彼女は普通に答えてき

た。
「すみれさんなら、朝早くにでかけた。楓さんが起きるよりも前だ。朝食なら……もう昼食だが、私でよければ何か作ろうか？」
「あ、うん、いや、……う、うん」
思い切りどもってしまった。
すみれというのは母さんの名前だ。つまり母さんが朝早く出かけた。姉ちゃんも今出かけた。ていうことは、何だ。今この家には俺とエドワードしかいないというわけか。
なんだかふわふわしたような、落ちつかない気持ちになりつつ、エドワードを追ってリビングに向かう。キッチンではエドワードが冷蔵庫の中を睨んでいた。
「ええと、たまご……、たまごやき……？　くらいなら、作れそうかな」
「な、なんでもいいよ。俺なんでも食えるから」
なんだろうこのシチュエーション。落ちつかない。
母さんは一体いつ帰ってくるんだろうと、俺はふとカレンダーを覗きこんだ。よく母さんがメモ帳代わりに予定を書きこんでいるので、何か書いてあるかもと思ったのだ。だがそこで、俺はとんでもない走り書きを見てしまった。
８：３０発、新幹線。
母さんが新幹線に乗るって言えば、目的はひとつしかない。……そうだ、思い出した。
「……そういえば母さん、父さんに会いにいくって、言ってたな……」
春休みになったら父さんに会いにいくんだって、母さんは楽しみにしていた。具体的な予定は忘れたけれど、日帰りではなかった筈だ。
律華先輩のとこに泊まると言っていた姉ちゃんの声が頭に蘇る。ってことは……
「今日はずっと、二人きり……？」

そんな俺の呟きは、卵が焼ける音に掻き消された。

12．もっと先へ…

見事な黄金色のオムレツは、色だけでなく形も焼き具合も味も絶品だった。

付け合わせの野菜も色どりよく、盛り付けのセンスもいい。

エドワードって、天才的な軍人って言われてたけど、もしかして軍人として天才なだけでなくて本当にオールマイティなんではなかろうか。天から三物も四物も貰っちゃった口なんだろうか。

「昨日すみれさんに教えてもらったんだが、どうだろう。口に合うか？」

「うん、旨いよ。エドワードって何でもできるんだな」

あっという間に全部平らげた俺を見て、エドワードはほっとしたように微笑んだ。

うっかりそれに見惚れそうになって、慌てて空の茶碗と皿を重ねる。それを流しに運ぼうとしたら、エドワードがそれを遮った。

「片付けるよ」

「いッ、いいよ。自分でやる」

食器を受け取ろうとした彼女の手が触れて、思わず声が裏返った。別に、向こうの世界で過ごしてたときは二人きりなんて珍しくなかったのに。不自然なくらい意識しまくってしまう。

でもこのところ、彼女を強く意識するたび、俺なんてとてもじゃないけど釣り合わないって現実に気付いて辛くなる。

美人で強くて、言語習得の早さからみて多分頭もよくて、料理もうまくて優しくて。どこにも非の打ちどころがないじゃないか。

しかも彼女の元婚約者は、長身で顔もよくて、エドワードと同じくらい優れた軍人だった。性格には難ありだったけど、でも……エドワードのことを想う気持ちは本当だったと思う。

あの後に俺じゃ、いくらなんでも落差が激しすぎる。

なんて、ついつい余計なことまで考えて落ち込んでしまった。暗

い気持ちで食器を流しに置く。
「やはり、似合わないか」
水を出したところで突然そんなことを言われて、俺はエドワードを振り返った。
今はピンクのエプロンもしていなくて部屋着のままだし、何のことかわからなくて答えられない。でも後に続いた言葉を聞けば、余計に声が凍りついた。
「戦場で剣を振っていた方が私らしいか」
しばらく、水がシンクを叩く音だけが響く。
それは、そんなエドワードを見たくなくて必死だった俺からすればショックな台詞だった。でもすぐに気付く。……きっと傷つけたのは、俺の方だ。
「そんなこと、思ったことない」
否定したのは分かったのだろう。ふっとエドワードが相好を崩す。
「だって、咲良が珍獣でも見るように私を見るから」
「そ、そんなことないよ」
エドワードが笑いながら冗談めかして言い、俺は少しほっとしながら水を止めた。
珍獣見るみたいに見てるのはそっちだろうと思うけど。俺は単にいちいち見惚れてるだけで、だけどそんなこと恥ずかしくて言えない。意識しすぎて言葉も出ないなんて、言えるわけない。
「俺は、ただ……」
改めてエドワードへと向き直る。
こんな風に、二人で話をするのは久しぶりだ。
守られているだけなのが嫌でヴァルグランドを飛び出してからは、彼女とゆっくり話をする時間なんてなかった。結局再会してすぐ、突然こちらに呼び戻されてしまったし。……それで考える暇もなく、彼女を連れてきてしまった。
それからは、家族とも一緒だし、まだエドワードは生活に慣れていないだろうし、何より言葉が通じなくて、彼女の気持ちを後回し

にしてた。本当は、何をおいても真っ先に確認しなくちゃいけないことだったのに。
例え言葉が通じなくても、気持ちを伝える方法はあるのに。
「咲良……、冗談だ。そんなに気に病むな」
よっぽど俺は思い詰めた顔をしていたのか、エドワードが困ったようにそんなことを言い、手を伸ばして俺の頬に触れた。温かい手。この手にいつも救われてきた。今だって。
俺も両手を伸ばすと、それをエドワードの背に回して抱き寄せた。見た目よりずっと華奢な体が、さらに小さくなった気がする。やっぱり無理してるんじゃないだろうか。いたたまれない気持ちになったけれど、エドワードにぎゅっと抱きつかれたら思考回路がショートした。
こ、ここから俺は一体どうしたら。
いや、落ちつけ俺。別に何もしなくていいじゃないか。このままで充分幸せなんだから。
……でも全然彼女の気持ちを聞いてないし、俺もちゃんと伝えられていないし、これ以上のことってしたことないし、前のアレは別れの挨拶っぽかったからノーカンな気がするし、折角二人っきりだし、いい雰囲気だし。

――そろそろ、もっと先へ進みたい。

そんな欲求が、爆発しそうになった瞬間。

ピンポーンと、インターホンの音が家中に鳴り響いた。

「……」
無視を決め込む俺をあざ笑うかのように、ぴんぽんぴんぽんと、インターホンは鳴り続ける。てか、誰だよ。連打すんなよ。
しかたなくエドワードを離すと、何故か彼女はくすくす笑ってい

た。多分俺がとても意気消沈していて、それが面白かったんだろうけど。
くそ、これで新聞の集金とかだったら解約してやる。
逆恨みもいいところだし、勝手にそんなことしたら母さんに怒られるが、それくらいの復讐をしないと気が治まらない。健康サンダルに足を突っ込んで、俺は珍しく不機嫌を全面に押し出しながら、乱暴に玄関を開けた。
「はい、誰ですか！？」
「……何で怒ってるの、咲ちゃん」
俺の勢いに、来客が少し驚いたようにあとずさる。だけど俺は逆に、その相手に驚いていた。
「律華先輩……」
「卒業式ぶりー」
思い出したくない記憶を呼び起こす言葉を吐きながら、来客――律華先輩が、俺に向かって手を振った。

13．誰が為の想い

俺は中学のとき剣道部に入っていて、律華先輩はそのとき女子部の主将だった。

姉ちゃんの友達ということもあり、先輩はよく俺を構ってくれたから、一時期は噂になった。けど先輩はそれを「咲ちゃんは妹みたいなもの」の一言で突っぱね、周囲もそれで一発で納得した。それによって俺が相当凹んだのは言うまでもないが、ここだけの話である。

それでも先輩への憧れは消せなかった。ただ、好きになるのは、先輩に勝ってからだって思っていた。今思えば随分変な考え方だけど、そんときは真剣だったんだ。一度も先輩に勝てないのに好きだなんて、情けなくて自分で許せなかった。でも結局勝てなくて、俺は剣道をやめた。

だから告白する気もなかったのに、先輩が県外の大学への進学が決まり、俺は悪乗りした友達に「もう会えなくなるぞ」と脅されて、半ばヤケクソで告ってしまった。どこまでも中途半端で、流されやすくて、どうしようもない馬鹿だ。案の定あっさり振られた。

それから異世界に召喚されたりしていた俺にとっては、もうずっと昔のことみたいだ。でも実際には一週間も経っていないんだろう。それを思うととても気まずい。

と、気まずさで何も言えない俺をよそに、先輩はいつもと全く変わらない調子で声を上げる。

「楓、いる？　ケータイ繋がらなくて。貸してた参考書返してもらいたいんだけど」

でもその内容は少し妙なものだった。だって、姉ちゃんは律華先輩と会うって言ってたのに、会うならわざわざ取りに来る必要はない。それでさっきの推測は確信に変わった。

それでも一応、携帯を取り出して姉ちゃんにかけてみる。……電

源が入っていませんのアナウンスが流れた。
「姉ちゃんなら、律華先輩んちに泊まるって言ってでかけて行きましたが」
「え？　あ……えーと」
事実をそのまま告げると、律華先輩はきょとんとした後、焦ったように取り繕った。
「あ、あはは……、そういえばそうだった。ごめんね」
今更取り繕うのは無理だろう。乾いた笑い声をあげる先輩を見ていたら、いくら俺でもわかる。姉ちゃんが律華先輩と会うって言ってたのは嘘だ。やっぱり男だな。春休みだし、旅行でも行くんだろう。
母さんは何事においても鷹揚な人だけど、さすがにそれは許可しないだろう。だから律華先輩の名前を借りたんだろうけど、だったら俺はともかく先輩にくらい言っておけばいいのに。
ため息をついていると、誤魔化すように先輩がはしゃいだ声を上げる。
「あー……、気付いちゃったよね。そうだ、何かオゴるよ。お昼まだでしょ？」
「いえ、食べましたから。別に口止め料貰わなくても言わないですし」
「じゃあお茶でもしようよ。この前のお詫びってことで」
お詫び、の言葉に引っ掛かりを覚える。それって振ってごめんってことだろうか。他に詫びられる覚えがないからそうなんだろうけど。なんかそれってどうなんだろう。
俺だって、ヤケクソの告白じゃ誠意に欠けたかもしれないけど、それでも振ってごめん、オゴるから許してーじゃいくらなんでも軽すぎやしないか。
「……詫びられるようなことされてないですし」
「でも、振っちゃったし」
ストレートな返事が返ってきて、恥ずかしさに今すぐこの場から

消え去りたくなった。
「すみません。それ、もう忘れて下さい。それじゃ用事があるので失礼します」
「あ、咲ちゃん……」
先輩はまだ何か言いかけてたけど、俺は一方的に会話を切ると玄関を閉めた。
失礼な応対だったかもしれないけど、これ以上話している余裕がなかった。
俺ってほんとに男として見られてないんだなーっていうことを痛感してしまった。告白しても、先輩の態度は今までと全く変わらない。
エドワードも同じなんじゃないだろうか。俺に対して好意的に見えても、それは弟とか犬とか可愛がるのの延長線上にあるんじゃないだろうか。そう考え出すと、実にそうなんじゃないかと思えてきて虚しくなってきた。
「咲良」
「……ん」
玄関にしゃがみこんでうだうだと考えていると、頭上からエドワードの声が掛かった。それでもなかなか顔を上げられずにいたのだけれど。
「あの人が、咲良の想い人？」
「ッ、ななッ、なんで！？」
思わぬ言葉に跳ね上がる。エドワードは心でも読めるのだろうか。エスパーなのか。と思ったところで、だが俺は頭を振った。
「っていうか、違うよ！　俺の……、俺が好きなのは」
エドワードなのに。
そういえば、エドワードに先輩の話をしたことはあった。振られたってことも言ったことあったっけ。だけど、それはもういいんだって話もした。その後に、エドワードがいなきゃ駄目なんだってことも……言ったと思うんだけど。

なんだか自信がなくなってしまって、肝心なところは尻すぼみに消えてしまった。立ちつくす俺をエドワードは真っ直ぐに見つめてきたけど、俺は目を合わせられない。
「……咲良、話がある」
小さいため息のあと、エドワードがそんなことを言う。
その声はいつもより少し固くて、あまりいい話ではないっていうのを暗示してた。気が重かったけど、無視することもできなくて、返事をする。
「……何」
「朝から気になっていたんだが。君はもしかして、私の為に無理をしていないか？」
はっとして、俺は自分の口に手を当てた。
エドワードは、それなりにこっちの言葉を理解できるようになってきている。通じないと思って配慮するのを忘れていたかもしれない。そう思って朝からの会話を思い出してみるが、彼女がこんなこと言いだした時点で、きっともう遅い。
「言っておくが、私の為に君の生活を変える必要はない。私は君にそんなことを望んでいるわけじゃない」
そんな言い方をされて、ついむっとしてしまった。別に感謝して欲しかったわけじゃない。でも、エドワードが心細くないようにと思ってのことだったのに、迷惑みたいに言われたら辛い。
「でも……、エドワードだって、ずっと俺の傍に居てくれたじゃないか」
「私と君とでは立場が違う。……言っただろう。私は戦に疲れていた。君を守るということを自分への免罪符にして、軍から逃げていただけだ。だから君の為じゃなかった」
エドワードの声はどこか自嘲的だった。だけど、俺にはそれを気に掛ける余裕がなかった。
彼女が何を思って、どうしてそんなことを言うのか、考えることもできなかった。

「こっちの世界のこと……、何も知らない癖に。一人で大丈夫って言うのかよ？」
「確かに知らぬことの方が多い。だが迂闊に出歩けば殺されるわけでもあるまい。君は私に知らぬ世界で不自由を強いていると思いこんではいないか」
俺がずっと気にしていたことを言われて、一瞬返事に詰まる。そんな俺を見て、エドワードは苦笑した。
「だとしたら、それは君が不自由な生活とはどんなものかをを知らぬだけだ」
苦笑というより、どちらかといえば嘲笑に近い笑い方に、かっと頭に血が上った。
怒り……ではない。どちらかといえば、惨めさとか、恥ずかしさの方が強かった。
何も知らない子供だと馬鹿にされた気分だった。
今の状態では、エドワードは教育を受けられないし、病院で治療を受けようと思ったら高い金額が必要だ。ちゃんとした職も中々見つからないだろう。でもそれを可哀想だと思うのは、この豊かな日本で生きているからこそで。
エドワードは、一瞬先が分からない戦場で生きてきた。
あの国で一番権力を持った家に生まれたろうに、母さんを殺されて、病気で兄さんを失って、彼女自身が傷だらけになって戦ってきた。その報酬が望まない結婚を強いられることだった。彼女自身がそう思っていなくても、まるで道具みたいに、エドワードは今まで生きてきたんだ。そんな過酷な人生を生き抜いてきた彼女に、今更俺が何をしてやれるって言うんだろう。
握り締めた拳が震える。惨めで、辛くて、悔しかった。
なんど強くなろうと思っても、その度に俺は自分の弱さを知るだけだ。……彼女に俺なんか必要ないんだって、思い知るだけだ。
「……そうだな。あんたに俺なんか必要ないよな。いらないよな、俺なんか！」

ぐちゃぐちゃになった思考が、全部まとまって真っ黒になってぶつん、と切れる。

呼びとめるエドワードの声が聞こえたけど、俺は聞こえない振りをして家を飛び出していた。

１４．雨降って犬は啼く

家を飛び出して、俺はとにかく走った。無我夢中で走った。全力疾走した。

何も考えたくなくて走ったけれど、そうしていたら思い出してしまった。

異世界へと呼ばれたあの日、聖少女だと言われ戦争させられそうになって、俺は砦を逃げ出し今みたいに走っていた。でも考えなしに飛び出してしまって、どこへ行けばいいのか、これからどうすればいいのかわからなくて途方に暮れた。

そんな俺に手を差し伸べてくれたのが――エドワードだった。

「――ッ、くそッ！」

まだ疲れてもいないのに、足がもう動かない。俺はその場に膝を着くと、毒づきながら力任せに地面を殴った。当然ながら舗装された道路に勝てるわけもなく、血まみれの手の甲がじんじん痛む。

何やってるんだろう、俺。

「何やってんの、咲ちゃん」

俺の心の声が現実に聞こえてきて、俺は慌てて立ち上がった。

「せ、先輩……」

律華先輩だった。

急に頭が冷えてみれば、めちゃくちゃ恥ずかしくなった。全力で走ってきていきなり地面を殴りつけるとか、いつの時代の青春ドラマだ。見られていたことを知って、俺は羞恥で顔が上がらなくなった。

どうやら無意識に自分のランニングコースを走ってきたらしい。俺はわざわざ先輩んちの近くをコースに設定していたりしたわけで、これでは先輩と鉢合わせても無理はない。

「え、えーと……、アスファルトに戦いを挑んでました」
「ふーん。で、勝てた？」
「いえ、負けました」
「だろうね」
突っ込んでくれないので仕方なくボケ倒す。けど目撃者が先輩だけだったのは不幸中の幸いだろう。お蔭で頭も冷えた。
けど冷えたらエドワードが心配になった。俺を追い掛けて迷子になっていないかと焦ったけど、俺がエドワードを振りきれるとは思えないし追い掛けてるなら追いついているだろう。それに、迷子になって困っているエドワードなんて想像できない。俺じゃないんだから、彼女は短絡的な行動は取らないだろう。それは分かっているんだけど。
「それ、手当てしようか？　うち、すぐそこだし」
「ありがとうございます。でも大したことないですから」
「咲ちゃんてしょっちゅう怪我してるよね。いつも負けてるし」
先輩の言葉がぐっさり刺さった。
確かに俺は負け試合も怪我も多い。……でも、俺の怪我なんて怪我のうちじゃない。

いつも勝っていたって、傷だらけの人もいる。

「寄っていきなよ。今家誰もいないし、気を遣わなくていいよ？」
「いえ……」
帰ります、と言いかけてふと気になった。誰もいない家に男を誘うってどうなんだろう。いや、男だと思われてないのは知ってるけどさ。
「別に誰もいないからって何もしないよー」
逆だし。
笑う先輩を見て、俺は重いため息をついた。でも、もう馬鹿な俺でも解ってる。

俺がいつも男として見てもらえないのは、女顔だからとか、ましてや女みたいな名前だからとか、きっとそんなことが理由じゃない。
何をしても中途半端で、ぐだぐだと悩むくせに、結局は楽な方へと流されていく。女々しいなんていう言葉は女の人に失礼だけど、俺には相応しい言葉だろう。
「あの、先輩」
「んー？」
間延びした声を返してくる先輩に、俺は真っ直ぐに向き直った。
先輩にとってはあの日のことなんて、些細な日常の一コマに過ぎなかったかもしれない。でも俺にとっては相当なトラウマになっていることに気がついた。
振られたことがじゃない。振られることも、男として見てもらえないこともわかってた。いくら体を鍛えたところで、そんなの全然意味がないってことも心のどこかで分かっていたんだ。でも自分の弱い面に向き合おうとしないまま、流されていたことを思い知った日。そんな自分が受け入れられる筈がないって痛感した日。
あのときはそれでもいいやって思えたけれど、今は思えない。全然思えない。
何度命をかけても、他の何を失っても、失いたくない人がいる。だったら、過去の痛みと向き合うくらい、今の俺にはなんでもない筈だ。
そして、帰らなきゃ。
その気持ちを胸に、歯を食いしばって顔を上げる。
「前にも言いましたが、俺、中学校のときから先輩が好きでした。でも、好きっていうより憧れだったんだと思います。俺、昔から中途半端で、弱くて、だから強い先輩に憧れてたんです。だから先輩に勝ちたかった。もし勝てたら告白しようと思ってました。でも一度も勝てなかったのに、卒業するからって理由をつけて流されたんです。すっげぇカッコ悪いですよね。振られて当然です」
笑って誤魔化そうと思ったけど、うまく笑えなかった。先輩は笑

うんじゃないかと思ったけど、先輩も笑わなかった。というか、急にこんなことを言いだした俺をぽかんとして見ていた。無理もないだろう。自分でもらしくないと思う。今までなんでも曖昧に終わらせてきたから。

「あのとき先輩があっさり振ってくれたから、俺は自分の甘えに気が付けました。だから俺、今度こそ強くなります。今までありがとうございました！」

「……咲ちゃん……」

これで言わなきゃいけないことは言った筈だ。言葉を切った俺に、でも先輩は唖然としたまま俺を呼んだだけだった。本当なら待つべきなんだろうけど、でも俺にはまだしなきゃいけないことがある。

黙ったままの先輩に一礼して、俺は回れ右をした。

■　□　■

走って家まで帰り、玄関に飛び込もうとすると、尻尾を振りながらシホウが飛び出してくる。

「シホウ、俺今忙しいから――」

軽いデジャヴを覚えつつもそう言うが、シホウはズボンの裾に食いついて離してくれない。いつもはそんなことしないのに。何か言いたいのかと足を止めると、シホウは俺を離して自分の小屋の方を振り返った。その視線を追ってようやく気がつく。

「エドワード……」

気がつかなかったけど、シホウの小屋の前にエドワードがいた。しゃがんでシホウを撫でていたんだろう。片手を宙に浮かせたまま、彼女は一瞬だけこちらを見たけどすぐに目を背ける。

「お前が一緒にいてくれたのか。ありがとう」

礼を言ってシホウの頭を撫でると、シホウは満足そうに目を細める。駄目な飼い主のフォローをしてくれるなんて、ハチ公もびっくりの名犬だ。

エドワードは俯いたまま顔を上げてくれない。もしかしたら、今度こそ愛想を尽かされたかもしれない。でも、もう遅いかもしれないけど、それでも言わなきゃいけないことがあるから、俺はエドワードに近づくと、口を開いた。

「ごめん、エドワード。俺、いつも中途半端で、悩んでばっかで、ちっとも強くなれないしちゃんと守ってもあげられないけど……、でも、エドワードが俺のこと必要なくっても、俺はエドワードの傍にいたいんだ。だから、これからも呆れられたり、傷つけたりするかもしれないけど、でも……」

ちがう。これじゃただの言い訳だ。いつもと何も変わらない。

エドワードはまだ振り向いてくれない。でも俺は勇気を振り絞って、声を張り上げた。

「俺、エドワードが好きだ！　だから、ずっと……、俺とずっと一緒にいて下さい！」

叫びながら、地面に頭突きしようかという勢いで頭を下げる。走ってきた後ろくに息継ぎもしないで叫んだために、ぜーぜーと息が切れた。

なかなか答が返ってこなくて不安になるが、考えてみたらかなりの早口だったし、聞き取れなかったのではないだろうか。そう思って恐る恐る顔を上げ、そして俺は絶句した。

「え、あ……」

こちらを見上げるエドワードの頬には、涙の跡があった。そして、新しい涙がまたその跡を伝って落ちて行く。

エドワードは泣かない。どんなに辛いことがあっても絶対涙は見せなかった。泣いているのを見たのはただ一度、俺がこの世界に戻されそうになったとき。もう会えないと覚悟した、あのとき。

激しく動揺して何も言えない俺の目の前で、エドワードが立ち上がって涙を払う。

「……要らぬ男を違う世界まで追いかける奴があるか、馬鹿ッ！」
「ご、ごめんなさい！」
怒鳴られ、俺は反射的に謝った。その間にもぼろぼろとエドワードが涙を零し、おろおろしていると背後から急にシホウが飛びかかってくる。狼狽していた俺はバランスを崩してつんのめり、その俺を支えようとして、エドワードが手を伸ばす。……でも俺はなんとか自分で踏みとどまって、エドワードを抱き締めた。
足元でシホウが、わん、と鳴いた。

15．しあわせの日常

「痛ーッ！　痛い！　かけすぎ！」
家に入ると早速手の傷に目をつけられ、エドワードに消毒薬をぶっかけられて悶絶した。
手当てしてくれるというのでお言葉に甘えたが、これはケンカの仕返しとととらえるべきだろうか。恨みがましい目でエドワードを見ると、同じような視線が返ってきた。
「これくらいで騒ぐな。男だろう」
「ハイ、ゴメンナサイ」
そう言われてしまえば返す言葉もなく謝る。実際、こんな傷手当てが必要なほどのものでもない。消毒薬でべたべたになった手の甲に息を吹きかけていると、再びその手をエドワードに捕まえられた。
また何かされるのではと身構える俺の目の前で、傷の部分にガーゼを当てられ、手慣れた様子でエドワードが包帯を巻いてくれる。そこまでするほどの怪我じゃないから遠慮しようとしたけれど、結局包帯を巻き終えるまでエドワードは離してくれなかった。
「……自分を傷つけるような真似はしないでくれ」
薬や包帯を仕舞いながら、エドワードがそんなことを呟く。見ていたわけでもないだろうに、なんでそんなに見透かしているんだろう。
「うん……ごめん。ありがとう」
素直にそう言うと、エドワードはほっとしたような、それでいてどこか寂しそうな、複雑な表情をした。
「言葉。さっきは解ったのに、元に戻ってしまった」
「え、そうなの！？」
驚きの事実を口にされ、俺は素っ頓狂な声を上げてしまった。やっぱり俺、喋れるんじゃん。
やっぱり、日頃はどっかで日本語を意識しちゃうんだろうな。だ

から俺の言葉も日本語になっちゃうんじゃないだろうか。やっぱり、無意識にならなくちゃ駄目なんだ。さっきはとにかく無我夢中で余計なことなんて何も考えられなかったもんな、って、ちょっと待ってくれ。

「……ってことは、さっきの全部通じてたの！？」

「ああ、最初から最後まで全部一字一句はっきりと」

考えながらとんでもないことに気付き、思わず悲鳴に近い声を上げてしまった。対してエドワードは真顔のまま、やけにはっきりきっぱりと答えて顔から火が出そうになる。全然通じていなかったと言われても泣きたくなるが、通じていなかったかもしれないとちょっとほっとしていただけに、今すぐ穴を掘って潜りたい。

「……手、動かしづらくないか？」

「あ……、う、うん。全然だいじょぶ。ありがと」

話を逸らされて心底ほっとした。そう言われて、包帯を巻かれた手を握ったり開いたりしてみる。どちらもスムーズにできた。包帯巻くのうまいねって言いそうになって、慌てて口を噤む。

……好きで上手くなったわけではないだろう。

「俺のことより、エドワードは大丈夫なのか？　前の怪我、酷そうだったけど……」

「……？」

通じなかったのだろう。救急箱の蓋をしながら首を傾げてエドワードが俺を見上げ、俺はその脇腹に指先だけで触れながらもう一度聞いた。

「怪我。エドワードは、大丈夫？」

こっちに来る前に、確かその辺りにエドワードは酷い怪我を負っていた。今のでエドワードも理解したのだろう、そっと俺の手を外しながら、薄く微笑む。

「……大丈夫だ」

「ほんと？」

「ああ」

エドワードの大丈夫はあまり信用できない。俺と違って顔にも出ないから、確認したって結局真偽はわからない。疑わしそうな俺を見て、エドワードは苦笑した。
「本当に大丈夫だ。なんなら見るか？」
「うん」
心配するあまり、俺は何も考えずにエドワードの申し出に頷いてしまった。けれど俺が頷くと、え、とエドワードが戸惑ったような声を上げる。その顔にさっと赤みが差すのを見て、ようやく俺もはっとした。
う、うん。いや、そりゃそうだ。腕とかならともかく、脇腹を出すってのは、抵抗あるだろう。
「あ、あの、違うよ。違うっていうか、変な意味じゃないから。心配だっただけで……！」
慌てふためく俺を見て、今こそ笑ってくれればいいのに、赤くなって俯いてしまったエドワードに俺はさらに慌てた。
でもひとつ解った。エドワードってよく俺をからかってくるけど、いざ俺が困らなければ自分が困るようである。……今この状況でそれを知っても、俺が困るだけなんだけど。
「ちょ、あの……ごめん。別に、嫌ならいいから」
「……嫌というわけでは、ないが……」
真っ赤になってエドワードがそんな風に答えるもんだから、吹きそうになった。変な意味ではないにしろ、そんな言い方、……へ、変な期待をしそうになるじゃないか。
でも彼女が口にした理由に、そんなこと考えていたのを忘れる。
「見たら、私を傍に置きたいとは、きっと思わなくなる」
「そんなわけないだろ！　だって、俺は前にも見てる」
きっと、それだけ気にするということは、エドワードにとってよほどのトラウマなんだろうけど。でも俺にしてみれば、そんなことは気持ちが変わる理由にはならない。それに言葉通り、俺は既に一度見たことがあった。

エドワードと彼女の婚約者との確執を見て憤っていた俺に、彼女はその傷を見せて、こんな女は誰だって嫌がると。そう言っていた。
そのときも俺はそれを否定したけど、エドワードの中ではまだ決着がついていなかったみたいだ。
「あのときは、見て君が納得するならそれでいいと思った。でも今は……嫌われたくない」
脇腹をおさえながら、別人みたいに弱々しく、エドワードがそんなことを呟く。
……いつだって、エドワードは凛として強くて、誰の助けも借りず、一人でどんなことでも受け止めて、なんとかしてしまう。だけど、それだけが彼女の全てじゃないんだって――あの傷を見た日、俺は知った筈なのに。
それなのに、俺が弱いから、今でもすぐ彼女の強がりに甘えてしまう。
「……そんなんで嫌ったりしないよ。嫌われそうなのは俺の方だ。あのときから強くなるって、俺が守るって言ってるのに……いつも肝心なときに俺は、駄目で……」
「咲良は強い。君は私にない、私がずっと欲しかった強さを持っている。いつでも私の欲しいものをくれて、私を絶望から守ってくれる」
自嘲するばかりの俺なんかを、エドワードは眩しそうに目を細めて見る。俺が、エドワードを見るのと同じような目で。
「私だって、肝心なときに何も言えない。君が私の元を去ったときも、会談の後も、元の世界に帰るときも、そしてさっきも。素直に、行かないでと言えば良かった」
そう言ってエドワードは微笑んだけど、その目にはまた涙が溢れていた。
「私も君が好きだ、咲良。君がいない世界では生きていけない。だから私はここにいるんだ」
「……ッ」

泣きながら微笑むエドワードを見て、何か色んなものが吹っ飛んだ。
もう、我慢も限界だ。
無意識に伸ばした手が触れてしまえば――後はもう止まれなかった。

■□■□■

……その後どうなったかというと、別に、どうもならなかった。
カレシと喧嘩別れした姉ちゃんが不機嫌に帰宅して、止まらざるを得なくなった俺は、以後二度とシホウに待てはさせないと心に決めた。
そんなわけで、相変わらず何の進展もないまま日々は過ぎていく。
でもそんな当たり前の一日が、そこにエドワードがいることが当たり前になった日常が、俺にとっては何よりのしあわせだ。

※※※

冷えた空気に目を覚ますと、そこは見慣れた自室だった。
いや、自室と言うとやや語弊がある。自分の部屋には違いないが、自分が暮らしていた場所ではない。この戦で長く駐留している砦だ。
元より、自分の本当の住処や部屋などは、名を変えたときからそれと同時に失ったにも等しい。戦から戦へ。長く身を置く場所が自分の家だとするなら、私の家は戦場だった。
偽りでも王太子という身分を持つ以上、決して大軍を有するに広いとはいえぬ砦でもいつでも私は一人部屋を持っていた。そして戦況が落ちついていればそこで過ごした。寝起きするのはいつも一人。生活するのに人が傍にいては不都合な身であるから、それは好都合であると同時に常に孤独との戦いだった。
大抵のことは、長くすれば慣れる。しかしこればかりは慣れなかった。
一人で過ごすには広すぎる部屋。おはようと声をかけてくれる人のいない場所。
それでも、孤独という言葉を思い出したのは久方ぶりの気がする。
――何か、大事なものが抜け落ちている気がした。
まるで夢を見ているかのようにはっきりしない意識のまま、ベッドを降りて扉を開く。
それと同時に、喧騒が私を包んだ。
そこは既に砦ではなく、混乱と断末魔に彩られた戦場。私の住処とも言える場所。むせかえるような血の匂いと焦げた大地。
その中を、私は黒い軍服を纏い、黒馬に跨り、剣を振りかざして駆け抜けていた。
何のことはない、私にとってそれは日常だ。剣を振り、人を屠り、それを踏みつけて、ひたすらに勝利という形のないもののために血を流す。私という存在は、その為だけのものだった。

――違う。

けれど、ここは、何かが違う。

何故そう思うのかはわからない。けれど、誰かが違うと叫ぶ。

「――姉さん！」

その声に、金縛りにでもあったように体が動かなくなった。

懐かしい声に、凍った涙がこぼれそうになる。戦うことをやめた私に襲いかかる数々の刃、だけどそれは私に届くことはなく。

それを止めたのは、片刃の剣だった。

動けない私を置き去りに、その風変わりな剣を振るって戦場を駆けていくのは、白い髪と赤い瞳の――

「駄目だ」

それは、私の声だったのだろうか。それとも、彼か、弟か。

溢れる光の洪水に、その姿が飲み込まれ、悲鳴と涙がこぼれる。

「駄目だ。こちらにきては――帰ってきては駄目だ、姉さん！」

ぱん、と何かが弾けるような音と共に、光が全てを塗りつぶした。

■□■□■

「エドワード！」

呼ぶ声に目を開く。溢れるような光は陽光で、開け放しの窓から入る風に薄桃色のカーテンが踊っている。
そして、私とその窓の間に、心配そうに覗く漆黒の瞳がある。
「咲、良……？」
「勝手に入ってごめん。すっごいうなされてるの、外まで聞こえたから……」
起き上がると、カーテンと同じ薄桃のシーツを掴む手に雫が弾けた。汗だくなことに気付いて、手の甲で額を拭う。
「大丈夫？　今、タオル持ってくる――うわ！」
そう言って彼が去ろうとするので、咄嗟に頭に腕を回して止めていた。急に抱きついたせいだろう、焦ったような声を上げて咲良が固まる。そんな、相変わらずの可愛い反応を見ていると、波だった心がすっかり落ちついていった。
だが汗だくだったのを思い出して、すぐ手を離す。
「すまない。汚れるな」
「そ、そんなのはいいんだけど――どうしたの。体調でも悪いんじゃ……」
「違う。……夢を見ただけだ」
心配をかけぬ為に正直なところを話したが、どんな、と聞かれると言葉を濁すしかなかった。故郷や弟のと答えれば、きっと気に病むだろうから。
何故突然そんな夢を見たのかは、自分でもよくわからない。ただ帰りたいというのが理由ではない。
むしろ、あまり帰りたいとは思わなかった。夢に見てなおのこと思う。今もまだあの場所で戦っている弟には合わせる顔がないけれども、それが偽らざる気持ちだ。
「うーん……、よくわからないけど、そんなカッコで布団被って寝てたら、そりゃ汗だくにもなるしうなされもするよ」
そう言う咲良は半袖のシャツ一枚で実に涼しそうだが、私はと言

えば以前から使っている長袖の寝間着だ。生地もそこそこに厚い。
寝苦しいのはそれが原因だと分かってはいるが、薄着をするには抵抗がある。それを察したのだろう、咲良はまた、梯子を降りようとした。部屋の広さがそうない為か、このベッドは机と一体型になっていて、ベッドに入るには梯子を登る必要がある。
「俺、出てるし、上着脱いだら……」
「いい。構わないからもう少し居てくれ。……寝覚めが悪いんだ」
呟くと、咲良は足を止めてくれた。それを見てほっとする。
こちらに来て、百日はゆうに過ぎたろう。見知らぬもので溢れ、言葉も通じぬことに戸惑いを覚えることはあるが、ここには戦がない。目の前で理不尽に命が奪われることもない。疫病で苦しみもがくことも、飢えも乾きもない。
愛するひとが、それらに苦しめられることもなく、ずっと傍にいてくれる。
気が遠くなるほどの幸せ。それが時折、怖くなる。

咲良に出会った日から、私は随分弱くなったと思う。
今を失ったらと、そう考えるだけで、怖くて怖くて――仕方なくなるくらいに。

16．不可侵の聖域

俺は姫野咲良。ラブリーな名前と異世界トリップ経験があるということ以外は、極めて普通の男子高校生である。

そして同居人のエドワードは、男前な名前と風貌、そして異世界の住人だったということ以外は、割と普通の女の子だ。

……最近、普通の定義ってなんなんだろうと真剣に考える。

エドワードがこっちの世界に来てから、半年が過ぎようとしている。

季節は夏に差し掛かり、夏休みのお蔭で俺はまた、一日のほとんどをエドワードと一緒に過ごせた。しかし何か進展があったかと言われると何もない。

相変わらず俺は彼女にからかわれたり、弄られたりしながら、出会った頃とさほど変わりない毎日を暮らしている。あの告白はいったいなんだったのか。異世界に行ってたことより、あの瞬間の方が夢だったような気がする今日この頃。

だけど、エドワードがこちらに来たばかりの頃の、ある日突然いなくなってしまうのではと、そんな不安はだいぶ薄くなっていた。

それから、俺の我儘で彼女に無理を強いているのではないかと、そんな自責の念もまた、同じように薄くなっていた。

というより、俺がそれを気にして塞ぎこめば、彼女を余計な心配をかけるだけだということに気付いた。

彼女を幸せにしなければいけないと、俺は少し気負い過ぎていた。平和な世界で生きてきた、たかだか十七歳のガキが、そんな大層な目標を持ったってできるわけがないというのに。

今俺ができるのは、焦らないでゆっくりと、エドワードと一緒に歩いていくことだけだ。

情けない結論だけど、ただ空回りしていた頃よりは、少し成長し

た気がする。
なによりも、そうして傍にいて、エドワードが隣で笑ってくれることが俺を支えてくれていた。

でも夏休みも終盤に差し掛かった八月の終わり。
もうすぐ学校も始まるというのに、ここに来て、エドワードは思い詰めたような顔をすることが増えていた。

■　□　■

外からはいい風が入るけれど、それだけで凌げるほど残暑は甘くない。
Tシャツ一枚だけだけど、じっとしていても次第に額が汗ばんでくる。みんみんと絶え間ない蝉の声が、ますます暑さに拍車をかける。　でも、エドワードが動かないので俺も動けないままだった――そんな状況。
九時頃目覚めた俺がリビングに降りてもエドワードの姿はなく、調子が悪いのかもしれないからそっとしておこうとの母さんの提案に俺も同意したのが一時間ほど前。心配して様子を見に行ったら、彼女はこちらに心配をかけないよう気丈に振舞うかもしれない。半年一緒に過ごして、母さんもエドワードのそういう性格を見抜いているようだった。
進学せず働いている姉ちゃんは、既に仕事に出かけている。デパートでアパレル関係の仕事をしているので、夏休みも祝日も土日も関係なしだ。十時を過ぎると、母さんも買い物に出かけた。
うなされているエドワードに気付いたのは、その後だ。その声があまりに尋常でなかったので、呼びかけたけれど反応がない。いてもたってもいられずに、部屋に入って揺り起したのがついさっき。
幸いエドワードはすぐに目覚めたけれど、様子が少しおかしかった。まるで、何かに脅えているような――そんな感じさえする。

戦場で果敢に戦い、剣をつきつけられようが、どんな深手を負おうが、いつも毅然としていた彼女のそんな様子は、初めて目にするものだった。
「……すみれさんや、楓さんは？」
それでも、しばらくすると彼女も落ちつきを取り戻した。汗を拭いながら、家族の所在を問いかける彼女に答える。
「姉ちゃんは仕事。母さんは買い物に行ってるど、もうすぐ帰ってくると思う」
彼女はそうか、と小さく答えると、また伏し目がちに俯いて、か細い声を返してきた。
「なら、それまでいい……傍にいてくれないか」
「う、うん……、いいけど……」
いつになく思い詰めた様に、心配がつのる。その一方、俺は動く気配のないエドワードに少し困っていた。
エドワードの部屋は元々物置代わりに使っていた小さな部屋で、スペースの都合上、彼女のベッドは机と一体になっているタイプだ。だから、俺は今梯子の上にいる。
傍にいて欲しいと言われても、エドワードが動かなければ、俺はこのまま梯子をつかんでいるか、もしくはベッドに上がるしか道がない。前者はまだしも、後者は気が引ける。
母さんだってもうすぐ帰ってくることだし、そうでなくともこの状況で妙な気は起こさない。……と思う。でも、女の子のベッドは男の聖域だ。即ち、うかつに侵入してはいけない。
そんなわけで動けずにいる俺を見て、エドワードは少し不思議そうな顔をしてから、自嘲気味に笑った。
「……すまない。君と出会ってから、私はどうも君に依存しがちだ。気をつける」
「いっ、いや別に！　俺は……頼って貰えた方が嬉しいけど……」
依存された覚えは悲しいくらいにないんだけど、もしエドワードにとってそういう存在になれているなら、俺としては嬉しい。素直

な気持ちを告げると彼女の笑みから自嘲的なものは消える。
ほっとしたように、嬉しそうに笑う彼女を見て、俺は無意識に梯子を一段昇ってしまった。……やばい。　別に妙な気は起こしてない。ただ、元気のない彼女を、抱きしめて力付けたいと思うだけ。けどそれをやってしまって、果たしてそこで止まれるのか。そんな自信は微塵もないくせに、踏み出した足を止められない――が。
「ただいまー」
母さんの声と玄関の開く音に、俺は思い切り次の一歩を踏み外して転落した。

17．パスタと妙案

買い物から帰った母さんが昼食の支度をし、エドワードがそれを手伝う。夏休みの間見慣れた光景を、俺は仏頂面で眺めていた。

「なんて顔してるの、咲良。……それに、どうしたのその擦り傷」

そんな俺に気付いて、母さんがそんな声を上げる。

足を踏み外した俺は、そのまま勢い良く顔面を梯子で擦りながら落下したわけで。けどそうなるまでの顛末を、親に説明できるわけもない。

「聖域に立ち入ろうとしたら神の裁きを食らった感じ」

「……マンガの読み過ぎなんじゃない、あなた」

婉曲に告げると、お小言を食らった。んなファンタジーな漫画、読んだことないわ。

どうして俺がエドワードに何かしようとすると、ことごとく邪魔が入るんだろう。本当に、神かなんかが見ていて意図的にやっているとしか思えない。と考えて、ふと俺はそれが正しいんじゃないかと思ってしまった。ただし、意図的にやってるのは神じゃない。

「じゃなければあれだ。超絶シスコン君が異世界から俺を呪っているに違いない」

「やっぱりマンガの読み過ぎじゃないの。それか、テレビアニメの見過ぎ？」

俺はそんなオタクじゃない。

というか母さん、エドワードが異世界から来たっていうの忘れてないか？

ともあれ俺の呟きを聞いて、エドワードが俺を振り向きくすっと笑った。彼女には通じたらしい。

――エドワードには弟がいる。もちろん向こうの世界の住人で、今はもう会うことはできないが。

こいつが超が数千、いや数万回はつくシスコンで、姉さん大好き、

姉さん命、口を開けば姉さん姉さんという、とにかく極度のシスコンだった。俺がエドワードに拾われた頃は俺を目の敵にしていて、隙あらば刃物を持って襲いかかってきたっけ。絶対にあいつとは仲良くなれないと思っていたな。

もう会うことのない友人を思いだしたら、少ししんみりとした気分になった。俺がこうだから、エドワードにしてみれば尚のこと、そしてあいつ自身はそれよりさらに。会えないことが辛いだろう。

「エドちゃん、調子悪いんじゃないの？　無理しなくていいのよ？」

ふと心配そうな母さんの声に我に返る。エドワードはそんなことないと首を横に振っていたが、俺は座っていた椅子を下げて立ち上がった。

「俺が手伝うから。エドワードは休んでなよ」

「本当に大丈夫だ。それに私は、じっとしているより動いている方が好きなんだ」

トマトを裏ごししながら、エドワードがそう言って微笑む。その横では、母さんが大きな鍋を火にかけて、スパゲッティの袋を持っている。今日の昼食はミートソースパスタだろうか。

エドワードに断られてしまったので、俺は所在なく、また椅子に戻った。

……じっとしているより、動いている方が、というのは俺にもわかる。考え込むとロクな方に思考がいかない俺にとっては尚のことだ。けれど、エドワードは学校にも行けないし、友達もいないわけだ。いつも家事を手伝っていたり、母さんに料理やら編み物やら教わっていたりと、エドワードが暇そうにしているのは見たことないけど、いつも家の中にいたらそりゃ息も詰まってくるだろう。

そんな風に考えて、俺はふといいことを思いついた。

「俺さあ、昼食ったら道場行こうと思うんだけど。エドワードも一緒に行かない？」

俺の提案に、エドワードと母さん、二人が同時に俺の方を振り返る。

「ドウジョウ？」
「前に言ったことなかったっけ、合気道のこと。それを教えてくれるとこだよ。俺のじいちゃんがやってんだ。裏には剣道場もあるし、見てるだけでも楽しいと思うんだけど」
軍人の性質か、エドワードはよく俺の素振りを興味深そうに見ていた。型や技について尋ねられたこともある。
俺は昔から武道をやっているので、他武道を見たり習ったりするのは楽しい。エドワードが合気道に興味を持ったのも、それと似たところがあると思う。道場での稽古を見学したら、きっと楽しめるんじゃないだろうか。このところ元気がない理由はわからないけど、少なくとも気は紛れるだろう。気に入ったら、入門してもいい。その月謝くらいなら、俺の小遣いから払える。
と、俺はかなりいいことを思いついて上機嫌だったけれど、それを聞いた母さんは眉を潜めた。
「咲良、エドちゃんは調子が悪いんじゃないかしら？　何も今日いかなくても……」
「いえ、行ってみたいです。ほんとうに、体調が悪いわけじゃないですから」
裏ごしを終えて、フライパンを火にかけながらエドワードが母さんに答える。
「是非連れていってくれ、咲良。ずっと君の戦い方には興味があった」
そう言って笑うエドワードには、朝の塞ぎこんだような様子はもうなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7563y/

IN BLOOM ～元英雄と普通の学生～

2012年1月6日15時48分発行